

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』におけるメタ物語の存在

Metastory in *Nadja* of André BRETON

加藤 彰彦

Akihiko KATO

【要旨】

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』は表面的に見ればブルトンとナジャの出会いと別れの物語として捉えられるのであるが、1928年の初版に対して手を加えた1962年の改訂版に新たに付け加えられた「序言」には記述に代えて写真図版を挿入していると明言しているにも拘らず、ナジャの写真がないという点に注目し、それを本論考の出発点とした。第一部においては、テキスト自体をブルトンによるナジャへの診断記録として、本人に写真は不要であること、また自己同一性の観点からラカンを引用してブルトンがナジャに取って代わったためナジャが消滅したこと、ナジャは人物としてではなく対象aという空白を意味しているとして、その理由を明らかにした。また第二部においては、そこから導き出されるメタ物語の存在とその内容について言及した。ナジャは消滅することによってラカンの言う大他者としての視線に取って代わられたこと、ブルトンの欲望は対象aとしてアヴィニョンという街を指向すること、ブルトンは実はナジャと別れたいという欲望を持っていてナジャの消滅した後の空白を埋めることこそが欲望であるということ、しかしそれが安定したものとなるためには父なる存在としての象徴的なものが必要であること、その象徴的なものを支える大他者は『ナジャ』においては読者の視線であること、そしてその上でブルトンは自らの欲望に忠実であろうとするのだが、そのためには象徴的な間主観的体系に支えられていなければならない、もしそのような支えがなければ共同体においては自分にとっての象徴体系である美に依存しなければならないが、そのためには一旦間主観的共同体から距離を置くということでテキスト内でブルトンが消滅してしまうことをラカン理論によって明らかにした。最後にこれは事実に基づく物語であるが、神の采配によっては別の展開もあり得たということで、神の問題を指摘しておいた。

キーワード：『ナジャ』、メタ物語、対象a

序章

アンドレ・ブルトンが1928年にガリマールから初版を刊行した『ナジャ』については、いわゆるシュルレアリスムの小説として捉えられている。ブルトン自身『シュルレアリスム宣言』において、またこの『ナジャ』の第一部においても小説についての批判を行なっているのだから、『ナジャ』をシュルレアリスムの小説として提示する意味は当然ある。その内容についてはシュルレアリスムの精神を具現したと思われるナジャという女性との出会いと別れの物語であると言うことが出来るのであるが、単に物語として終わらないのは、その物語の後にブルトン自身の省察といったようなものが第三部として付け加えられているからで、我々もその

点については留意しなければならない。また『ナジャ』が現在我々が読むことの出来る状態に至るまでの過程というものが一方であり、1928年の初版以前に『ナジャ』の断片が公表されていたのだ。まず1927年の秋に『コメルス』誌に『ナジャ／第一部』という題の下に、次に1928年の5月にナジャの物語の中の10月6日の出来事が『ナジャ（断片）』として『シュルレアリスム革命』誌に出ている。これだけを見ると、ナジャという不思議な女性に出会ったことを綴った物語として捉えることが出来、それはブルトンが1924年にガリマールから刊行した『失われた足跡』の中にある「新精神」に出てくる不思議な女性との繋がりを指摘することが出来る。つまり『ナジャ』はこの流れにあるものとして捉えることが出来るのである。そしてそれは何も我々の勝手な推測というわけではなく、ブルトン自身『ナジャ』においてそのことに触れているのだ。「私は彼女と出会った時私が彼女に貸した『失われた足跡』を一部彼女が手に持っていたのに気付いた。それは今テーブルの上にありそして、その縁を見ると、その数頁だけが切られているのに私は気付く。何とまあ、それは「新精神」と題された小文の頁で、そこにはある日、数分ずつの間隔で、ルイ・アラゴンによって、アンドレ・ドランによってそして私によってなされた、驚く程の出会いが正確に語られているのだ。」(PI p.691)¹⁾

つまりブルトンもナジャも、自分たちがこの「新精神」の延長線上にいることに自覚的であるのだ。ここにおいて論点を先取りしてラカンを持ち出してくるなら、「新精神」における不思議な女性もナジャも謎の女性として、つまりは対象aとしての機能を果たすのである。確かにいるのかいないのかもわからないような完全な妄想の産物であってはならないが、明確にその存在が明らかになり、その姿形や人格まで明らかになる必要はないし、むしろそうなることによって謎の女性としての存在価値はなくなってしまうだろう。つまり存在することはわかっているが、その詳細については明らかではないという点が想像力をかき立てるものであり欲望を維持させるのである。「新精神」においてその女性がどこの誰であるかについては全くわからないままであるが、少なくともブルトンやその友人たちが目撃しているということから、現実に存在していることは確かなのである。この女性について少なくとも文献上はこれ以上言及はされていないのであるが、謎の女性としてブルトンの想像力をかき立てる存在であることは明らかとなった。その流れの中でのナジャの登場なのである。10月6日の記述において「新精神」との繋がりが指摘されるとともに、ブルトンはナジャを捉えて「人はここでシュルレアリスム的な憧れの頂点、その最強の限界理念（下線原文）に触れるのではないか。」(PI p.690)とシュルレアリスムとの関連を位置付けるのであるから、ブルトンの意図はより明確だろう。ところが『ナジャ』はこれでは終わらないのである。10月6日の記述だけ見れば、シュルレアリスム精神を具現化した女性と出会ったという不思議な体験としてそれ自体シュルレアリスム的と形容し得るものであるが、『ナジャ』はこの後も続くのであり、結局のところブルトンはナジャに失望し別れるという形をとることになるし、ナジャの物語が終わった後も『ナジャ』として完結するわけでもなく、ブルトンの追求は依然として続いているのだ。もちろんナジャがどのような人物であるかが明確になったというのではないにしても、既に指摘されていた謎の女性としての存在は失われている。10月6日あたりの記述で終わっておけば、ナジャは謎の女性として我々の想像をかき立て続けることが出来たのである。実際会ってみれば普通の女性であっ

たというどころではなく、生活上もかなり問題のある女性で、ブルトン自身これ以上会うことは出来ないと思うに至るのである。謎の女性として位置付けることが出来なければ、我々はどのように『ナジャ』を読み取っていけばいいのか。我々がこの論考において試みたのは、テキストにおいて示されている物語を読み取るのではなく、主題的には示されていないメタ物語を読み取るということなのである。例えばその一つとして、テキストには本来書かれるべきであることで書かれていないものは何かを探ることにもなるだろう。書かれていないというのは何も我々の要求に応えていないという一方的な判断ではなく、思いもよらない否定や矛盾あるいはもっと明確にすべきことが曖昧にされているといったようなことである。あるいはこうも言えるかもしれない。普通なら何の問題もないようなことが『ナジャ』においては問題になるというようなことがあるのだ。ブルトンは1928年に『ナジャ』の初版を刊行したのだが、1962年に自らこのテキストに手を加え、1963年に同じくガリマールから新版を刊行している。この際使われている用語を適正にするとか流暢なものにするとか、ある記述を削除するなどされているわけであるが、我々がここにおいて問題にしたいのは、この新版において「遅れた至急便」と題して「序言」を付け加えていることなのである。その中で注目すべきは次の記述である。「この作品が従っている〈反文学的〉な二つの主たる要請のうちの一つのために、特に『ナジャ』についてはこのような事情になっていることがある。つまり豊富な写真による説明が全ての記述を排除する目的であるのと同時に——『シュルレアリスム宣言』においては空虚さに見まわれた描写であったが——、物語のために採用された語調は文体に関して言えば報告する際に最小限の飾り気をも気にかけることなく、検査や問診が漏らすことの出来る全ての痕跡を留めることを目指す、医学的、中でも神経精神医学的観察記録の語調を模倣している。人は、途中で、『ありのままにとられた』資料を何ら歪曲しないように気をつけるこの決意は、ナジャという人物に対してと同様にここにおいては私に対しても第三者に対しても適用されていることに気付くだろう。」(PI pp.645-646)

この記述のうち「医学的、中でも神経精神医学的観察記録の語調を模倣している。」(PI p.645)という点は、我々がこの後で触れる問題と深く関わってきて、充分な根拠として示せるものであるが、我々がここで指摘しておきたいのは、一切の描写を除去する目的のためにこの作品の中に豊富な写真図版を挿入しているという意図がブルトンによって明確にされているにも拘らず、ナジャ本人の写真が一枚もないのだ。テキストの中にはナジャの物語が始まる以前の段階でシュルレアリスム的な体験を綴った挿話群があるが、その中にはシュルレアリストであるポール・エリュアール、バンジャマン・ペレ、ロベール・デスノス、あるいは劇場で見かけた女優であるブランシュ・デルヴァルの写真があるし、ナジャの物語においてはさほど大きな役割を果たしているとも思われないサッコ夫人、精神病院の問題に触れている時に言及されているサン・タンヌ病院のクロード教授の写真が示され、ナジャの物語が終わった第三部においてはブルトン自身の写真が挿入されているのみで、ナジャ本人については一枚もない。ひょっとしてブランシュ・デルヴァルがナジャなのかとも思わせるが、そうではない²⁾。テキストの中には、特に初めて出会った10月4日の記述の中に奇妙な化粧をした女性としてナジャが描写される程度である。本来なら写真を示すべきであったし、そうしたかったのであるが様々な事情

によりそれが果たせなかったというのであれば、たとえ注の形においても理由が示されるべきであるし、また不思議なのはこのナジャの写真が挿入されていない点について、『ナジャ』の研究において言及されていないということだ。既にあるものとして取り扱われているかのである。ブルトン自身わざわざ「序言」において明言したことは矛盾する事態をどう捉えるか。通常小説は虚構のものであるため、いくら登場人物にモデルがいてもその写真を示す必要もないし要求もされていない。しかし『ナジャ』においては事情が異なるのである。主人公とも言うべき書物の題名になっている人物の写真がないのだ。我々はここから始めなければならない。

第一部 ブルトンによるナジャ

第一章 ブルトンによるナジャの症例

何故ブルトンは「序言」において「物語のために採用された語調は（中略）医学的、中でも神経精神医学的観察記録の語調を模倣している。」(PI p.645)とわざわざ書かなければならなかったのか。それは他ならぬナジャの物語とされているテキストが、神経精神医学上の観察だからである。そもそもナジャの写真が不要である人物の最たるものはナジャ本人に他ならない。つまりナジャの物語として示されているテキストは、ブルトンがナジャに向けて書いたものであるのだ。それも神経精神医学上の観察の記録としてである。ナジャの物語は主としてブルトンがナジャと出会った10月4日から日付として示されているのは12日までの日記形式で書かれたものであるが、それ以降の出来事も日付なしに記されている。その中でナジャの物語の終わり近くに次のような記述がある。「数か月前、ナジャは気が狂っていると人が私に教えにやって来た。彼女がホテルの廊下で身を任せた奇行の結果としてと思われるが、彼女はヴォクリューズの精神病院に収監されなければならなかったのだ。」(PI p.736)

ここで指摘しておかなければならないのは、このような判断はブルトンによるものではないこと、ブルトンはあくまで人から伝え聞いたこととして記しているということである。何か他人事として取り扱われているような距離感があるが、ブルトンの下した措置ではないという点を明らかにしたいのだろう。いずれにせよ全てはこの記述に収斂するかのようである。つまりナジャの物語はこの観点から読むことが出来るということである。あるいはブルトンは我々に最終的な結末を納得させるためにテキストを書いているのだと言ってもいい。ブルトンがナジャと初めて出会った10月4日にブルトンは簡単にナジャの外見について言及しているが、奇妙な化粧とかひどい格好をしているのもその徴候として捉えられるかもしれない。またブルトンはナジャについて次のように書いている。「私は彼女をもっとよく見る。この眼の中にかくも異常な何かがよぎることがあり得るのか。」(PI p.685)

これは先入観をもってして読めばそのように読めるということかもしれないし、あるいはシュルレアリスム的な傾向という指摘も可能であるかもしれない。彼らが家に帰ることになってブルトンはナジャにある質問をするのだが、この答えも判断の分かれるところだろう。「まさに立ち去ろうとしているところで、私は彼女に他の全ての問いを要約する一つの問い、それを発するのは、恐らく、私しかない問い、しかし、少なくとも一度は、それに比肩し得る答

えを見出した問い、つまり《あなたは誰なのか》を聞いてみたいと思う。そして彼女は、ためらいもせず、《私はさまよえる魂なの》。」(PI p.688)

この少し変わった答えも状況としてはシュルレアリスム的と形容することも可能だろうが、奇妙であると指摘することも十分可能だ。10月5日の記述だが、ナジャはタクシーの中でブルトンに自分がしている遊びのことを語って聞かせる。「ええっと、私はね、こんな風に一人でいる時自分に話しかけるし、あらゆる種類の話をも自分に語って聞かせるの。それに下らない話だけじゃないわ。私が生きているのはまさに完全にこんなやり方でなの。」(PI p.690)

これだけで異常と決めてかかることは出来ない。ブルトンはこれをシュルレアリスムの極致だとして高く評価しているが、これも極端になれば自分の声が聞こえる、つまりは幻聴という症状に繋がりがかねない。少なくともとりあえずは指摘しておくべき箇所ではあるだろう。10月6日にブルトンはナジャとドーフィヌ広場に行き、近くで食事をすることになるのだが、ここでのナジャは靈感のある女性として描かれている。また前世においてはマリー・アントワネットの側近の一人であったという。これも判断が難しいところであるが、通常見えないものが見えるという点は指摘しておいていいだろう。ここまでは異常とは言えず、少し変わったところのある女性だ、シュルレアリストの好みそうな女性だと判断して終わりかもしれない。ところが10月12日、これは日付のある最後の記述となるのであるが、ここに至ってナジャはいささか異常の度合を深めてくる。「私は彼女の独語についていくのにだんだん苦勞するようになり、長い沈黙が私を言葉に表わせないようにし始める。」(PI p.713)

ブルトンにしてみればナジャはシュルレアリスム精神を体現した女性として魅力的に映っていただろうし、日付のないつまりは10月12日以降もブルトンはナジャと会い続けていたのであるが、同時に距離を置かざるを得ない事態にも至っていたと思われる。実際にいくら魅力的に見えていても、例えば10月12日から13日にかけてナジャがツインマーというビヤホールで起こした乱闘事件について聞かされれば、最早恋愛対象として考えることも無理になってくるのである。だからこそブルトンは冷静に自分自身の気持ちを次のように分析するのである。「私は何度もナジャと会ったし、私にとって彼女の思考は更にはっきりしてきたし、それに彼女の表現は軽やかさ、独創性、深みをつけてきた。同時に彼女自身のそして最も人間として決定的な一部分を巻き込んでいる破綻、私があの日思い知っていた破綻が少しずつ彼女から私を遠ざけたということはある得る。」(PI p.718)

ここにある「破綻」とは既に示したビヤホールでの乱闘事件のことであるが、そのような事件とは別にブルトンはナジャを精神的にも受け入れられなくなってくるのだ。これはナジャが精神病院に入ると記された前の段階での記述であるが、「私は、結構前と言える頃から、ナジャと理解し合うことをやめていた。実を言えば、私たちは少なくとも生活の単純な物事を検討する方法については、一度も理解し合ったことがなかったのだ。」(PI p.735)

これはあくまで推測でしかないが、いずれにしてもナジャは既に不安定な精神状態にあったことは確かである。このような状態にあるナジャはブルトンに対して依存的になり、かつ情熱的とも受け取られるような感情の激しさを示したりすることがあるので、それを魅力的と感じ、ブルトンも恋愛感情のようなものを持ち、ナジャとの関係に取り込まれてしまったと言えるだ

ろう。しかし一方で精神状態の不安定さが重症となり、まともな対人関係を築けない、もめ事を起こすということになると最早恋愛対象としては捉えられないということになる³⁾。つまりここにおいてブルトンとナジャの関係はいわば精神科医とその患者の関係となるのである。ブルトンはナジャが精神病院に入れられたという事実を受けて、精神病患者に対する扱いについて自論を展開するのであるが、「人はそこ（＝精神病院）で狂人を作る（下線原文）」(PI p.736)という考えを前提にして次のように述べている。「お金持ちには当然であるあらゆる点で特別な精神病院で治療されて、彼女を傷つけ得るいかなる雑多な集団を我慢することなく、しかし逆にちょうどいい時に友好的な身近にいる人によって励まされ、彼女の趣味においてできるだけ満足させられ、現実の許容出来る意味で少しずつ回復させられたなら、それは人が彼女を全くつけんどんに扱わないとか彼女の不安の始まりに彼女自身を遡らせるという労をとるとかいった必要があるだろう、私は恐らく思い切ったことを言っている、しかし全ては私に彼女はこの間違った段階から脱しただろうと信じさせるのである。」(PI p.740)

精神病院のあり方について自論を展開しながらも、ナジャについてはいささか他人事のようにも思われる。ブルトンはナジャが精神病院に入れられたという時点から出発し、そこから遡ってナジャの精神状態について異変を感じ始めた経緯を記したと言えるのだ。それではこの診断記録は誰に対して届けられるものなのであろうか。ナジャが発狂したのはブルトンがナジャの生活に介入したからだと主張する人々がいたわけで、つまり「私以外の他の人たちは、先行している全てのことの運命的な結果として彼らには間違いなく見えるだろう、この事実に対して非常に無益ではあるがとやかく言うだろう。最も経験豊富な人たちは、私がナジャについて報告したことの中で、既に常軌を逸した考えに、持たせると都合がいい関与を急いで探すだろうし恐らく彼らは彼女の人生における私の介入、これらの考えの展開に実際上好都合な介入に、ものすごく決定的な価値を帰するだろう。」(PI p.736)ということから、ブルトンはその間の事情を説明するために周囲の人々に読んでもらうべくテキストとして提示したとも言えるが、たとえ精神病院に入っていて『ナジャ』を読むことが不可能であるとしても、ナジャとの関係を恋愛関係としてではなく、精神科医と患者として提示すべく、ナジャに届けられるものである。従ってナジャ本人がその記録に自分の写真を必要とすることはあり得ない話なのである。

第二章 ブルトンとの一体化によるナジャの消滅

ナジャが精神的に些か不安定な状態になったため、これ以上親密な関係を維持することは出来ないと判断したブルトンであったが、問題となっているのはその精神状態のことであって、それを除けばナジャはシュルレアリスム精神の具現化された存在としてブルトンに捉えられていたのである。従ってブルトンが『ナジャ』の冒頭において「私は誰なのか。」(PI p.647)という問いを発する時、ラカンの言う鏡像段階の対象として捉えられる他者とはナジャに他ならない。この場合未成熟な自己は空無と言っていい存在であるため、敢えて無にするという手続きを経る必要もないくらいであるが、自己を確立するために自分がそうなりたいという対象に自己を同一化させることによって、自己の形成を果たしていくのである。従ってこの場合消去

されるのは、とりあえず主体の方である。ブルトンは『ナジャ』の冒頭における先程の問いに続いて、この問いに答えるためには自分が誰とつきあっているhanterかを問題にすればいいと解決策を提示している。「それはそれが意味するよりはるかに多くのものを示しているし、それは私の存命中に私に幽霊の役を演じさせるし、明らかにそれは私である誰か（下線原文）であるために、私が存在することをやめなければならなかったことをほのめかすのである。これを受け入れることでほとんど度を越したやり方で捉えると、私が私の実存の客観的表われ、多かれ少なかれ意図的な表われとして思っているものは、その真の領域が私には全く未知の活動から、私の人生の限界の中に移動してくるものにすぎないと私に理解させるのである。」(PI p.647)

つまり自己というのはとりあえず存在しているが、いわば中身のない容器のようなもので、そこに何かを入れていくことによって自己を確立していくことになるのであるが、ブルトンにとっては『ナジャ』の第一部、つまりはシュルレアリスムの体験の挿話の中に出てくる様々な人物が、ブルトンをブルトンたらしめることになるのである。例えばブルトンはある劇場で知らない人から間違って話しかけられる。「コンセルヴァトワール・ルネ・モーベルで、アポリネールの『時の色』の初演の日、幕間に私がバルコニー席でピカソと話し合っていた時、ある若者が私に近付き、数語をたどたどしく話し、結局彼は私を、戦争で死んだと思われた、彼の友人の一人と私を取り違えていたのだということを私に理解させてくれる。」(PI p.653)

後日まだ会ったことのないポール・エリュアールとブルトンは文通を始めるのであるが、このエリュアールこそが劇場で話しかけてきた人物だったのである。確かに不思議な体験であるが、ここで気になるのは戦争で死んだはずの友人の方で、彼がどういう人物であったかということから、それを知ることによってブルトンという人物が形成されていくようにも思われる。また別の挿話においてブルトンはある芝居で見た女優を賞賛するのであるが、実はその女優は別の芝居にも出ていて、それが同一人物であることを知らなかったという不明をブルトン自身恥じていて、その役柄に隠された人物を知るべきであったと反省しているのだ。ちなみにこの女優こそブランシュ・デルヴァルなのであるが、いかなる人物であるかを知ることこそブルトンが自分を知ることにつながるのである。このような問いかけは『ナジャ』の中で繰り返されていて、第一章でそれは精神科医の診断記録として示されたわけであるが、ブルトン自身の希望からすれば精神的状態がさほど不安定ではないナジャがいかなる人物であるかを発見することこそが目的だったのである。初めて出会った10月4日の別れ際にブルトンはナジャに対して「あなたは誰なのか。」(PI p.688)という問いを発するし、後でナジャとの関係を考え始めるところで、「本当のナジャは誰なのか」(PI p.716)という問いを自らに投げかけるのだ。確かに初めて会った時にはどのような人物であるかわからないし、ある程度会うことによってナジャがシュルレアリスム精神の具現化された存在であるとともに、生活面においては些か問題のある女性であることも明らかになってきて、ブルトン自身対応に苦慮している。ブルトンとしてもある程度の答えは用意しているのであるが、相手がいるということもありそう簡単には実行に移せない。ブルトンにしてみれば、ナジャという女性が存在したという事実、またそのナジャに実際に出会い関わったという事実が重要なのであって、関係を続けるということはさほど重

要ではない。むしろ生活面精神面に問題があるとなれば、関係を断ちたくなるのも理解できる。しかしそうなるとナジャの気持ちはどうなるのだということだ。そのあたりの心境が既に10月7日の記述において見られる。「私が彼女に抱いている関心の種類について彼女を安心させないとか、彼女は私にとって好奇心の対象、彼女はどのようにして信じるだろうか、気まぐれの対象ではあり得ないことを彼女に説得しないとかはまた許し難いだろう。どうするか。そして明日の晩まで待とうと決心するのは不可能だ。もし私が彼女に会わないとなると、今日の午後はどうするか。そしてもし私が彼女に最早会わなかったのなら。私はもうわからないだろう(下線原文)。私は従って最早わからないことに甘んじるべきだったのだろう。そしてそれは決して元には戻らないだろう。これらの偽りのお告げ、ある日のこれらの恩寵、魂の本当に危険な場所、深淵、予見の素晴らしく悲しげな鳥が身を投げ出した深淵があり得るのだ。」(PI p.701)

ここにおいてナジャとはまさにラカンの言う対象aである。何か素晴らしいもののように見えて引き付けられ近寄ってみる。確かに素晴らしいように思えるのだが、更にもっとよく見てみようとする、そこには何もなくて、むしろひどく恐ろしいものが見える。危険だと思い、早く立ち去らなければいけないと思う。このままではその深淵にからめとられてしまうというわけである。だからナジャが謎の女性のままでいて、決して近付くことができなかったという方が幸いなのである。その場合謎を探求し解明しようという欲望も維持されるからだ。しかしあまり近付きすぎると、そこにはラカンの言う〈現実界〉がある。これはこの現実にあって別世界との境界線にあると言えるだろう。ごく普通に生活していれば、それはあくまで別の世界として捉えられるか、もしくはその存在自体知覚されない。ところが近付きすぎると、ごく普通の世界が別の世界に取って代わられる。それは欲動の支配する暴力的な空間と言えるかもしれない。ナジャの精神状態が不安定になったのも、今まで外部に置かれていたものが日常生活という内部に侵入してきたためと考えることも出来るだろう。そこでブルトンはナジャと距離を置くことにしたのだ。ところが距離を置いて再びナジャを捉えてみるならば、それはまさにシュルレアリスム精神の具現化された存在なのである。ブルトンにとって鏡像段階にある対象とはナジャに他ならない。当初ブルトンは主体を無にすることによって鏡像を受け入れ、自己の確立を図ることを考えた。しかしブルトンの取った方策は、ナジャを消滅させ自らがそれに取って代わるということなのである。これを理解するために、我々はラカンの「パラノイア性犯罪の動機——パパン姉妹の犯罪」を参照することが出来るだろう。パパン姉妹は鏡像段階とも言えるべき空間を雇い主との間に形成していて、自らが雇い主になったりするという奥様一女中ごっこに興じていた。その時点ではあくまで遊びの次元に留まっていただけであるが、些細なことから雇い主を殺害してしまうという惨劇に至る。つまりそれまでは遊びの領域でしか奥様になれなかったパパン姉妹が、実際に雇い主を殺害することによって、その奥様に取って代わるのである。このように理解するならば、『ナジャ』の第二部の最後において、ナジャが消滅したかのような記述も理解出来る。つまりブルトンはナジャに取って代わったのである。「それが詭弁であったとしても、少なくとも私が私自身に、私自身を出迎えに最も遠くからやって来ている人に、『誰だ』という、相変わらず悲壮な叫びを自分で投げかけることが出来たのはそのおかげなのだ。誰だ。あなたなのか、ナジャ。彼岸 (下線原文)、全ての彼岸が現世にあ

るのは本当なのか。私はあなたの声が聞こえない。誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)

ナジャの物語が終わった第三部において、ブルトンは物語の見直しをするのであるが、その始まりの言葉とともにブルトン自身の写真がp.745に挿入されている。ナジャの写真はない。

第三章 ナジャとは人物ではなくて場所である

ナジャの物語の最後でナジャがいないかのような記述が出てくるため、当初ナジャは本当に存在するのかという憶測も流れたようである。実際ブルトンとナジャの手紙もあるということから、ナジャの存在は事実として受け止められているが、テキストが生まれた時点で、ナジャは別の働きをするようになる。要するに唯一の女性という存在ではないのだ。そのことを我々に意識させるのは、『ナジャ』の第三部において注の形で示されているが、ブルトンがナジャと車に乗ってヴェルサイユからパリに戻る時の出来事を記した箇所である。実際に車の助手席に座っていたのはナジャであったにも拘らず、「私の隣に座っていた一人の女性はナジャだったが、しかし他のあらゆる女性、そして他の某女性（下線原文）でさえあり得たのではないか」(PI p.748)と書かれているのである。また実際にはシュザンヌ・ミュザールという女性であるが、その女性に対して「君」と呼びかけ、次のように書くのである。「それを故意にするのではなく、君は私にとって最も慣れ親しんだ姿に、同様に私の予感のいくつもの顔に置き換わった。ナジャはそうした顔の持ち主だったし、君が私からそれを隠したのも申し分ない。」(PI pp.751-752)

ここにおいてナジャがブルトンにとって唯一無二の女性でないことは明らかだろう。また物語の中でも、ナジャは本当にナジャなのかと思われるような仕掛けが為されている。まず10月4日のブルトンとの初めての出会いにおいて、ナジャは自らの名前を言うのであるが、「彼女は私に彼女の名前を言う、彼女が自分のために選んだものである。」(PI p.686)

とりあえずはナジャと名乗っているが、以前知り合っていた老人からレナと呼ばれていたことを話す。ナジャの話はこうである。「それから、彼は死んでいた彼の娘さんの思い出に、私をレナと呼んでいたの。(中略)でもこんな風に、夢見るように、レナ、レナ…と呼ばれることに最早耐えられないことがあったわ。その時私は彼の眼の前で、彼の眼のすぐ近くで、こんな風に手を数回動かして、そして私は言ったの、いいえ、レナじゃなくて、ナジャよ。」(PI p.690)

ここにおいてナジャはナジャであると確認されるわけだが、10月6日の出会いの中で、ブルトン自身が記した『溶ける魚』の中の芝居のようなテキストにおいてエレヌという人物に言及した箇所で、ナジャは自分がエレヌだと主張するのである。これをナジャの妄想であると片付けることも可能だが、「しかしながら、ユジーヌ通り3番地に住む、女占い師のサッコ夫人は、私の問題について今まで一度も間違ったことがなかったのだが、今年の初めに、私の思考は大きく一人の〈エレヌ〉という女性に占められていると私に断言していた。」(PI p.693)

ブルトンにとってはエヌヌという女性是不知なということだし、名前それ自体にも関心なかったと明らかにしている。その上でのナジャの発言であって、このことによってむしろナジャが唯一の女性という存在は揺らぐことになるだろう。また駅のホームでナジャは警察か

らD…嬢であるとして声をかけられる。事件に巻き込まれ誤認の可能性もあるが、エレーヌとは違い、現実においてナジャはナジャではないという可能性も出てくるのだ。次に10月12日、ブルトンがマックス・エルンストにナジャの肖像画を描いてもらいたいということで、エルンストに話をした時のこと、「サッコ夫人が、と彼が私に言うのだが、通り道でナディアとかナターシャとかいう女性を見たのだが彼は彼女を愛さないだろうし——これはほとんど彼女の言い回しだが——彼が愛している女性に肉体的苦痛をもたらすだろうということだ。」(PI p.710)

あくまで予言であり占いであるから、正確ではないかもしれないが、ナジャの同一性を揺るがせるには十分だろう。そしてこの後ナジャは別の人物に変わるのである。ブルトンとナジャがパレ・ロワイアルの庭園を巡っていると、「彼女は一瞬極めて巧みに、非常に奇妙な錯覚を与える程までに、メリュジーヌという人物を作り上げる。」(PI p.710, p.713)

あるいはまたその後ブルトンとナジャは気分転換と称してパリを離れるのであるが、サン・ジェルマンに着いたところで、「城の前を通りながら、ナジャはシュヴルーズ夫人の中に自分の姿を見た。」(PI p.714)

ここに至ってナジャの同一性がかなり揺らいでいることは明らかだろう。つまりブルトンにとってナジャとはある人物の名前というよりも、最早ブルトンの欲望の対象であり続ける対象aの別名なのである。従ってナジャが本当はどのような人物であったかということなど問題ではなく、ナジャは何を求められていたのかということが問題であり、そのためには別人であったところで構いはしないのである。再びブルトンがナジャを乗せた車の中で体験した出来事に話を戻すなら、愛という名の欲望の充足を可能にしたのはナジャであるが、にも拘らずナジャが唯一の女性というわけでもなく、このような欲望の充足を可能にしているのであれば、ナジャでなくても問題はないということである。実際テキストにおいて「互いに相手に全てを期待し全てを心配し得る非常に稀なある種の人々が常に自分の姿を相手に認めるのは挑戦という極限の能力なのである。」(PI p.748)と書かれていて、複数形で書かれていることに注目すべきである。つまりナジャとの体験を通して、ブルトンはそこにナジャという名のある位置空間を発見してしまったのである。そこにはナジャしか存在できないのではなく、つまりナジャでなければならないのではなく、別の女性でも可能である空間が形成されてしまったのである。仮にそこにナジャがいなくなれば、そこは空白であり、直ちに埋めなければならないことになる。あるいはこうも言えるだろう。ナジャという女性には確かに存在したのであるが、ブルトンが求めるナジャというのは、現実には存在する女性にブルトンが求める理想像を結合させて作り上げられたものであって、ブルトンがテキストで描き出しているナジャは最初から存在しない人物だったのである。この空白は何としても埋めなければならない。しかしブルトンにとって求めるナジャは現実には存在したと言えるのであろうか。ブルトンにとってナジャが存在するのはテキストの中だけである。ブルトンにとっての理想の女性という幻想にナジャが合致した時、二人は恋愛関係にあると言える。ナジャはブルトンの理想を背負わされたのである。ところがナジャがそのブルトンの幻想の場所、つまりは本来空白であった場所を埋めるのをやめた時に、恋愛関係に終止符が打たれるのである。このように考えるならばナジャはある女性の名前ではなく、ブルトンにとって理想の女性が占める位置もしくは場所の名前であることに気付くだろう

う。確かにナジャは救いを求める存在であって、ブルトン自身無関係ではないのであるから、ナジャとの関わりを続けるべきであるとする考えもあるだろう。しかしそれを可能にするためには、ナジャはブルトンに近付きすぎたのである。近付くことによってブルトンの幻想を壊してしまったということだ。つまりナジャがブルトンに近付いても尚ナジャの中には対象aがあるのかという問題である。恐らくこの問題に『ナジャ』のテキストは答えていない。その代わりに根本的な開放性もしくは可能性をブルトンは用意することになる。ブルトンは『ナジャ』の第三部において自己同一性についてのドゥルイ氏の話をして「君」という女性に語ろうとするのであるが、その際ブルトンはテキストを「《スイングドアのように自在に開け放っている》のを望んでいた」(PI p.751)と明らかにするのである。つまり誰が入って来ても出て行っても構わない構造にしているということである。ブルトンはその後「君しか入ったり出たりしない」(PI p.751)と書き添えるのであるが、それはあくまでその時点での話であり、また後から言える話として受け取るべきだろう。この『ナジャ』のテキストが書かれた時点でナジャの場所が埋められたわけではない。むしろナジャそのものが対象aであり、相変わらず空白の場所であることを明らかにするであろう。言い方を変えるなら『ナジャ』を読み終えた時点でも、『ナジャ』を初めて読むかのように再読することを可能にするものである。ここにおいてナジャの同一性は問われない。全く別の女性であっても構わないわけであるし、むしろそれが望まれていると言えるだろう。共通しているのは名前だけであって、全く別の人物であるということである。このように考えるならば、他の人物が入り込んでくることを妨害する装置がこのテキスト内にあってはならない。ナジャという名前は既に象徴的な記号であり問題はない。象徴化に抵抗する物質こそ写真であって、これが示されることによってこのテキストは閉ざされた空間となってしまうのである。ナジャに関する限り、テキストにおいて物自体は存在してはならないのだ。

第二部 ラカンによるブルトン

第四章 ナジャの視線は大他者の視線である

ナジャの物語の最後においてブルトンはナジャを消滅させナジャと同一化するのであり、『ナジャ』の第三部はブルトンではなくナジャの視線でもって語られることになる。そのため従来見ていたものとは違った様相を呈することになるのだ。ブルトンはまず初めにナジャの物語が展開された場所を再度見直すことにするのだが、以前見た時と同じようにはならない。「私はこの物語が導くことがある場所のいくつかを見直すことから始めた。というのも、私は何人かの人物やいくつかの物についてと同じように、私自身がそれらをまじまじと見つめていた特別な視点で捉えられた正確な映像を作り出すことを強く望んでいたからだ。この機会では、私はいくつかの例外を除いてそれらは多かれ少なかれ私の企てに対して身を守っていたことを確認したわけで、その結果『ナジャ』の写真の部分は、私の意見では、不十分だった。」(PI p.746)

このようにナジャの視線で見えていくと、以前とは違った形になるのは理解できるとしても、それではナジャの視線は一体何を見ようとしていたのか。言うまでもなくそれはブルトンである。ナジャにとって問題となるのは、ブルトンとは誰かということであり、我々はここにおいてテキストの中にブルトンとは誰であるかを探ることから始めよう。とは言ってもブルトンは

自分が誰であるかを知るためにナジャを通して見ていたのであるから、自分自身について詳細に知っているはずもないのだ。それでもナジャはブルトンが誰であるかを問題にしている箇所はあるので、それを見ていくことにしよう。10月4日の出会いで、ナジャは自分の名前を言った後、ブルトンが誰であるかを聞くのだ。「彼女はたった今私が誰であるかを（この言葉の非常に限定された意味で）私に尋ねようと考えたばかりだ。私は彼女にそれを言う。」(PI p.686)

10月6日に「新精神」の謎の女性との出会いが問題になってくるのだが、ナジャが説明を求めたところ、これはブルトンの内面特に何を求めているのかという欲望に関する話となる。「彼女はこの一日の短い出来事の物語が私にはとやかく言う必要はあり得ないと思われた事実に驚き失望している。彼女は私に私がその物語にあるがままのものを帰している厳密な意味について、そして私がそれを公表したのだから、私がそれに提供している客観性の度合いについて自分の考えを説明するようせき立てる。私はこれについては何も知らない、このような領域において確認する権利は私には許されていることの全てのように思われる、もし背任があるというなら、私はこの背任の最初の犠牲者だったのだと答えなければならないが、私は彼女がそんなことでは私を許してくれないというのがよくわかるし、私は彼女の視線の中にいらだちと、次に落胆を読み取る。多分彼女は私が嘘をついていると思い込んでいるのだ。」(PI p.691, p.693)

ここにおいてナジャにとってブルトンは誰であるかということがわかる謎が隠されているということなのである。確かに「新精神」の延長線上に『ナジャ』があり、そこでブルトンは様々な思考を巡らせているということを考えるなら、「新精神」においてブルトンはいかに発想を展開させていたのか重要なところである。ただ「新精神」において謎の女性についてあまりよくわかっていないということがあるため、言えることはあまりないというのが実情なのだろうが、むしろその部分が空白であることによって、ブルトンの幻想が大きくなり、ブルトンとはどのような人物であるかが逆にわかるということも言えるのである。この後二人はドーフィーヌ広場からコンシエルジュリの方へと向かうのであるが、このあたりでナジャは靈感を働かせ前世を見るということになる。そこで語られるのが次のようなものである。「でも、ねえ、何故あんたは牢獄に入らなければならないの。あんたは何をしてしまうことになるの。私も投獄されていたわ。私は誰だったの。何世紀も前のこと。それであんた、あんたは誰だったの。」(PI p.697)

ナジャによれば、自分はマリー・アントワネットの側近の一人で、ブルトンもその周辺の人物だったとされているらしい。しかしこの点については、ブルトンとナジャは前世においても関わりがあったのかもしれないと指摘するだけのことである。そして日付のある記述の後、ナジャがブルトンのことをどのように捉えていたかについて記されている箇所がある。「彼女は、その言葉の十全の意味において私を神と取り違えたり、私が太陽であった（下線原文）と信じたりすることもあったということを私は知っている。」(PI p.714)

ジャック・デリダが『ディセミナション』の中で引用しているソクラテスの言によれば、「ところでこの父について、この資本について、この善について、価値と姿を見せている存在しているもののこの起源について、人は簡単にもしくは直接に話すことは出来ない。まず人は太陽以上にそれらを直視することが出来ないからである。」(LD p.101)ということから、ナジャが

ブルトンについて詳しく述べることは出来ないように思われる。このようにナジャの視線でもってブルトンを捉えることの困難はどこにあるのか。それはナジャの物語の最後において、ブルトンがナジャを消滅させ、ナジャに取って代わった時点でナジャの視線を得たものの、それでもってブルトンを捉えることは限界があるのだ。確かに日付のついた記述の後に、ブルトンがナジャとの関わりを「この死に物狂いの追求」(PI p.714)とした上で、ナジャがブルトンのことをどのように捉えているかを問題にした時、先程の太陽の箇所後に次のように続けられる時、つまり「私はまた思い出すのだ——この瞬間何ものもより美しくあると同時により悲劇的であることなどあり得なかったのだが——私はスフィンクスの足もとで恐れおののかされた男のように彼女にとっては黒く冷たく見えていたのだということを思い出すのだ。私は朝ある世界の上で彼女の羊歯の眼が開く（下線原文）のを見たのだが、その世界では巨大な希望のはばたきが恐怖のそれである別の音とほとんど区別がつかなくなっていて、この世界では、私はまだ眼が閉じるのしか見たことがなかったのだ。」(PI p.714, p.716)と書かれるとともに、「彼女の羊歯の眼」(PI p.715)と付された写真が挿入されるのであるが、それは最早ナジャの消滅した時点においてはナジャの眼ではなく、ラカンの言う大他者の視線として捉えられるべきものになるのである。たとえブルトンがナジャ自身の視線を捉えていたとしても、問題となるのはその背後にある大他者の視線なのである。言い方を換えるなら、その視線を意識することによってナジャの視線と同一化していると言ってもいい。ここにおいてブルトンは自分が何をしたいかとか何でありたいかを問題にするのではなく、ナジャの眼に従って大他者の眼にどう映るかを判断することによって行動するのである。例えばブルトンが次のように書く時、つまり「現実の前で、悪賢い犬のように、ナジャの足もとで横になっていると私が今知っているこの現実の前で私たちは誰だったのか。いかなる気候風土のもとで、このように狂おしい程象徴に委ねられ、類推の悪魔のとりこになって、最後の働きかけの、奇妙で、特別な配慮の私たちが陥っていた目的で私たちはあり得たのか。」(PI p.714)と書く時、ブルトンはナジャとともにいながら既にその背後に大他者の視線を感じていたのである。ここにおいてブルトンは自ら望むところを実践しているのではなく、一つの言い方をするなら、シュルレアリスムの理論に従ってその忠実なる実践者として行動しているのだと言うことも可能なのである。ブルトンにとってナジャの眼を見ることも出来るし、視線を捉えることも出来るだろう。しかしその背後にある大他者の眼を見ることは出来ないにしても、大他者は既に見ているのである。ここにはラカンの『セミネールXI』にある視線と眼との二律背反的な関係が示されている。つまり我々にとってその対象を見ることは出来ないが、対象の側では我々を見ているということである。仮にその対象が物として現実に示されるならば、欲望やら自己同一性に関する問いに対する答えの表象可能性の限界を越えて、全てはそこにあるということになってしまう。また同時に意識しなければならないのは、大他者の視線、ブルトンにとってはナジャの視線にどのように映っているかということである。そこに自分の求めるものを探ろうとしても、その視線は対象として存在するだけでなく、見る側の主体の求める幻想を突き崩す機能を果たすだろう。対象とは求められるべきものでありながら、その中身は空虚であり、対象aとして機能するのである。

第五章 対象aとしての場所

ブルトンが物語が展開してきた場所を見直す時、その写真撮影については不満があったようで、具体的な事例について述べているのだ。そしてそれとの関連で思い出に残る街並みの変化について触れていくのだが、それは他にも見られる現象だとした上で、突如「外的世界」として一般化された話となるのである。ブルトンの指向はここにおいて場所となるのである。これは次のように考えられるであろう。ブルトンにとってその欲望の対象は人や物体ということで、実体として捉えられるものであった。しかしそれは実のところ存在せず、空白を残すものとなった。つまりは対象aということである。ここにおいて対象aは最早物ではなく、空白という空間もしくは場所として捉えられるようになった。つまり対象aとは指向すべき空間、場所ということである。もちろんあくまで対象aであるから、確固たる形で存在しているわけではなく、実情としては空白なのである。ラカンが『精神分析の四つの基本概念』で明らかにしているように、それは最終的な目的地というわけではなく、欲望を可能にする幻想的な光景であると言えるだろう。普通幻想とは、たとえ現実ではなかったとしても、というか現実では不可能であるために、欲望の実現を可能にするものと理解されている。ところがラカン理論によれば逆であって、幻想は欲望を形成するものなのである。そしてその幻想の舞台として場所があるのだ。このように理解すれば、ブルトンがナジャ消滅の後突如として外的世界を指向したか理解されるだろう。ただこの外的世界は幻想ではあるにしても、全くの妄想というわけでもないのである。例えばこれは現実における体験が発端としてあり、それはその後消滅したか時間の経過とともに忘れ去られてしまったかで、実体というものはほぼないに等しいのであるが、想像の世界に生き続け、むしろそちらの方が実在しているかのように機能しているということがある。ブルトンにとってそれはアヴィニョンという街であって、この街は確かに存在していて実在の街なのであるが、その実在する街が幻想的に膨らんでしまっているのだ。「『ある街の外形』が、私の思考にとって空気が生命にとってそうであると思われているものであるだろう要素の力によって私が住んでいる街から取り出され分離された真の街がどうなるかについて思い巡らすことになるのは私ではない。いかなる末練もなしに、この時間私はそれが別のものになり遠ざかっていくのさえ見ている。(中略) 私はこの心の風景を下絵の状態にしておく、その境界線は私を落胆させるし、アヴィニョンの方に驚くべき延長部分があるにも拘らずである、(中略) そこでは素晴らしくかつ裏切ることの無い一つの手がまだそう前ではない頃に『黎明』というこれらの言葉を記しているスカイブルーの巨大な道路標識を私に指し示したのだ。」(PI p.749)

ここにおいて記されている道路標識とは、ラカンによれば目標ということであって、決して終点ではないのだ。この目標に向かって道を辿っていくことこそが欲望を満たすのであって、このような道を行き来するという反復運動を設定するものこそ欲動ということなのである。それにしても何故アヴィニョンなのか。これは何も恣意的に選ばれたものではなく、ブルトンが『ナジャ』において「君」と呼びかけている女性と関係があるのだ。『ナジャ』の刊行については既に触れたように、書物として公表される前に雑誌掲載というのがあり、「君」という女性が出てくる第三部を除く第一部、第二部は部分的に公表されているし、原稿の段階で「君」という女性にも見せていたようだ。これが1927年の秋あたりの出来事だ。ブルトンとこの「君」

であるシュザンヌ・ミュザールは最初に出会った時から意気投合していて、1927年の11月20日にはアヴィニオンに、25日にはトゥーロンに滞在している。ただ経済的な事情もあって、12月の上旬にはパリに戻ってきていたようである。この後シュザンヌは元の愛人であったエマニュエル・ベルルとよりを戻すことになり、ちょうどその時点でブルトンは『ナジャ』の第三部を書き終えることになる。それが12月末ということだ。このあたりの時期的なことはテキストにも反映されていて、「その中断の日付である、8月の末から、この物語が、今回は、精神というよりもむしろ心情に関係する感情の重みに私自身屈して、私が震えているままにするのは覚悟の上で私から離れる12月末まで」(PI p.746)と書かれている。また『ナジャ』の最後の部分で、その当時の状況を反映している箇所として次のような記述がある。「それ(=美)はリヨン(下線原文)の駅で絶えず跳びはねている列車のようなもので列車については私はそれが決して出発しないということ、出発しなかったということを知っている。」(PI p.753)

これだけでは理解が難しいが、当時の状況を考えに入れば、ブルトンの言わんとすることがわかってくる。ブルトンとシュザンヌは親しい関係にあったのだが、ブルトンとシュザンヌを引き離すべく、エマニュエル・ベルルはシュザンヌを連れてコルシカ島に行くことにした。その列車はリヨン駅から出発することになっていて、そのことを知ったブルトンはあわててリヨン駅に駆けつけるのだが、止めることは出来なかったのである。マルグリット・ボネによると、確かに現実の世界では列車は出て行ったかもしれないが、ブルトンの夢の世界では愛を信じるが故に列車は出発することはなかったのだと指摘している(PI p.1563)。ブルトンはシュザンヌが再び戻って来るというこの愛の将来に期待していたのであるが、ただ少なくともこの時点においては愛を信じることが出来る状況であって、そのことがテキストに反映されている。このように考えるならば、ブルトンにとってアヴィニオンという街や「スカイブルーの巨大な道路標識」(PI p.749)の持つ意味が理解されるだろう。ここにおいてアヴィニオンという街は実在するし、ブルトンは行ったこともあるということで、架空のものではあり得ないし、道路標識にしてもその写真がテキストの中に挿入されていて実際にあるということが我々にもわかるようになっていく。つまりこれらはブルトンの全くの創作というわけではないのだ。従ってブルトンは妄想にすぎりついているわけではなく、あくまで現実を問題にしているのである。しかしアヴィニオンに行けば再び愛が実現するかというところではないし、道路標識に従って行けば目的地に達するというのでもないのだ。最早ここにおいてブルトンがシュザンヌの愛を取り戻すことを考えているわけではない。仮にこの第三部が書かれた1927年の12月の段階でそのような望みを持っていたとしても、1962年に加筆訂正する段階でその後シュザンヌとどういうことになっていったかについてはブルトン自身知っているわけであるから、テキストに手を加えることも出来たはずである。ここにおいて問題になっているのは、シュザンヌの愛を取り戻すことによって欲望を実現させることではなくて、アヴィニオンや道路標識によってもたらされる幻想の中で欲望を再生産させることなのである。むしろ幻想の中でしか欲望は実現されないということなのだ。それではこの幻想は単なる妄想とどこが違うのか。少なくともブルトンはシュザンヌとアヴィニオンに出向き、そこに滞在したという経験があり、そのことによって街並みやそこにいる人たち、ホテルの設備や内装など細かい部分まで思い出すことが出来る。

そのため幻想も現実味を帯びるし、思いを巡らせることの繰り返しに耐えることが出来るのである。またここが重要な点であるが、現実ではなく幻想の空間にすぎないのなら、アヴィニオンでなくてもどこでもいいのではないかというそうではないのである。ブルトンがシュザンヌとアヴィニオンに行ったという事実が重要であるのは、アヴィニオンに行けば再び愛が可能になるのではないかという現実の可能性の問題ではなく、ひょっとすれば現実には別の展開があったかもしれないと考えることが欲望を生み出すからである。ここにおいて問題になってくるのは、最早ブルトンがシュザンヌとの愛を成就して欲望を実現させることではなくて、別の現実があったかもしれないという極めて論理的で現実的な考えに基づいて欲望の実現を先送りにして、欲望を維持し続けることにあるのだ。欲望の実現を求めてアヴィニオンに赴くことはあり得ない。そこで欲望の実現が果たされることはない。欲望とはブルトンの幻想の中であって、アヴィニオンや道路標識という対象aによって再生産され実現されるものだからである。

第六章 欲望とは主観的なもののなか

『ナジャ』の第三部において物語となった場所を見直すことから始めた時、街並みは違った様相を呈したということを別の観点から見てみよう。テキストによれば、「この機会では、私はいくつかの例外を除いてそれらは多かれ少なかれ私の企てに対して身を守っていたことを確認した」(PI p.746)と書かれている。確かに同じ場所といえども時間も経っているとあれば、客観的に同じということは本来あり得ないはずである。ただそこまで厳密に言わずに、ブルトンの側からすれば同じように見えてしかるべきと思えるのに違って見えたということであれば、変わったのはその場所の方ではなくブルトンの側なのではないかという指摘も成り立つ。ということは主観の問題なのか。『ナジャ』の第一部で見る位置によって違って見える絵の話が出てくる。「この目の錯覚は同じ日に、一二時間後、私たちが手袋をした婦人（下線原文）と呼ぶことになる婦人が私がそれまで見たことがなかったような変化する絵の前に私を連れて行かなかったとしたら何の重要性もないだろう、そしてその絵であるが彼女が借りたばかりであった家の家具の中に収まっていた。これは昔の版画で、正面から見ると、虎を表わしているが、表面をそれぞれ別の主題を断片に分けている垂直の小さな帯で垂直に細分化されていて、数歩左の方に少しでも離れれば花瓶を表わし、右の方に数歩行けば、天使を表わすのである。」(PI p.681)

このような例は他にも見出されるのであって、ラカンが引き合いに出して来ているのは『精神分析の四つの基本概念』の中にあるホルバインの『大使たち』の絵である。この絵は正面から見れば単なる二人の人物が描かれているだけなのだが、少し右斜めから見てみると大使たちの足もとに頭蓋骨が見えるという仕組みになっている。全ての人は死に無に帰するという意味が込められているとされるが、見る位置によって変わるという例としてはブルーストの『失われた時を求めて』の中にあるマルタンヴィルの鐘楼がある。主人公が馬車に乗っていると、進むにつれて鐘楼の数が違って見えるというものである。こういった例は目の錯覚として捉えられるだろうが、同じく『失われた時を求めて』の中にある紅茶とマドレーヌ菓子によってもたらされる幸福感については錯覚として処理出来ない問題がある。つまり主人公はある時紅茶に

浸されたマドレーヌ菓子を口に入れたとたんに、人生の悩みなど全て消し去ってしまう程の幸福感を味わうのであるが、これは紅茶とマドレーヌ菓子が好きで口にするといつも幸せな気分になれるというものではなく、偶然の出来事であり、逆に言うなら紅茶に浸したマドレーヌ菓子を口にしてもそのような幸福感はもたらされないということも日常的にあるのだ。ならばこれは全て主観的な問題として考えるべきなのか。この現実として表現されたものはあくまである主体から見た現実の姿であって、別の主体によって捉えられれば全く違った様相を呈するかもしれないということは容易に想像がつく。ナジャの物語はブルトンによって捉えられたナジャを含めた世界ということになる。しかしブルトンはナジャの物語の最後においてナジャの視線と出会った時、全ては宙吊りになってしまうのである。ここにおいて自分自身の欲望が問題になるのである。ブルトンはナジャに対してどのような幻想を抱いているか。それはナジャの欲望とは逆に、ナジャとの関係を回避し、出来ることなら先延ばしにし、追い払ってしまうことである。10月4日の初めての出会いによってブルトンとナジャは親しい関係になり、一時はブルトンはナジャに対して恋愛感情を抱くのであるが、一方でブルトンの欲望は徐々に発揮されていることを我々は読み取ることが出来る。初めて出会った10月4日の次の日の5日、「私は私の家に帰ろうとするが、ナジャはタクシーまで私と一緒に来る。」(PI p.690)

6日、「彼女は今自分一人のためにのように話していて、彼女の言っていることは全て同じように最早私の興味を引かないし、彼女は私とは逆の方向に顔を向けていて、私はうんざりし始める。」(PI p.698) もうこの段階で徴候が現われているのだが、7日になるとはっきりと次のように語られることになる。「もし私が彼女を愛していないのなら私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。」(PI p.701) 11日、「私たちはお互いそばにいながら、しかし非常に離れ離れに、街をあちこちそぞろ歩く。」(PI p.710)

そして半ば決定的なのが10月13日の出来事であって、「顔の真ん中に拳骨という話は(中略)10月13日の午後の始まりに、彼女がそれを理由なく私に語っていた時、もう少しで永遠に私を彼女から引き離すところだった。」(PI p.718) と書くに至っている。またその後には、「それが結局のところ不可能だったかは、私次第でしかなかったのだ。」(PI p.718) と書かれている。この10月13日以降もブルトンとナジャは会い続けるのであるが、事の詳細は書かれていない。しかしブルトンの意図は明らかであって、ブルトンはナジャと別れたのである。ブルトン自身そして我々も含めてナジャのシュルレアリスム精神の具現化されている有様に関心を奪われその展開を楽しんでいるかのように思われる。しかし「新精神」では果たせなかった謎の女性を解明することとかシュルレアリスム精神を実現させる生き方に興味を持ったブルトンが、同時にそこに存在している深みに入り込んでしまいそうになることに気付き、そのような事態を何としても回避したいと思うのだ。これに対してナジャの意図は明確である。従ってブルトンはナジャの視線の中に自分がどう思われているのかを読み取ろうとするのではなく、自分がナジャとの関係を断ちたがっているという事実を既にナジャがそれを知っているのではないかと怯えつつ、ナジャの視線を見るのである。ところがナジャが精神病院に入れられてしまうという事態になり、ナジャは対象として現実から見失われてしまう。そしてこれはまさにラカンのテーゼ「現実の領域は対象aの除去の上に成り立っているが、それにも拘らず対象aが現実の領

域を粹どっている」を例証している。通常の世界はナジャの存在を無視することで成り立っているが、ブルトンにとってナジャは必要な存在であったにも拘らず、それを除去することによって存在の欠如が生じてしまったのである。ラカンが『精神分析の四つの基本概念』で明らかにしているように、その空白を埋めるために、つまり存在の欠如を補うために何かを与えなければならない。この問題に苦慮していたために、ブルトンはナジャの物語を書き終えてから『ナジャ』を完成させるまで時間がかかったのである。それを埋めたのが「君」なる女性であったのだが、別に他の女性であってもよかったわけで、要するに求められているのは女性というシニフィアンであったと言えるだろう。ところがこれで問題は解決しない。そもそもそれは現実の領域に収まり切らない対象aであって、現実存在する女性を持って来ても、それ以上の何かを欲望が求めるからだ。そこでブルトンはラカンの言う「現実界のかけら」を持って来る。それは現実の世界において異物として存在するのである。例えばブルトンは物語の場所の見直しの中で、ある蠟人形に言及している。「そしてとりわけ、それはこの本の中で大して問題になっていなかったけれども私はどうしても固執しているのだが、グレヴァン蠟人形館で、ガーターを留めるために暗がりにそっと姿を消す振りをして、そして不動の姿勢の中で、私が知る限り眼（下線原文）、挑発のまさに眼を持った唯一の像であるこの女性であるところの素晴らしい幻想を写真撮影する許可を手に入れることが不可能だったことである。」(PI p.746, p.748)

これは恐らくナジャの代わりの存在となり対象aに近いと言うことが出来る。しかしブルトンは人形の形でナジャを現前させたいわけでも、ナジャを思い出したいわけでもないのだ。仮にこの人形で満足するというのなら、明らかに精神病の状態にあることになる。つまりブルトンはラカンの言う現実界ではなく、想像界のレベルでこの空白を埋めようとするのだ。何でも好きなように空想を巡らせるというのではなく、対象aが現実の領域から除去されることによって成立するとともに、その対象aが現実を粹にはめるというジャック＝アラン・ミレールのラカンの注釈を参考にするなら、現実存在して何らかの想像をかき立てるものが必要となってくるのだ。その場合あまりに近すぎると対象を見失ってしまうことになるだろう。ある程度の距離を置いた時に、対象aは機能し始めるのである。そしてここにおいて重要であるのは、この対象aによって現実に欲望が満足させられることはないし、そのことを充分に知っているということなのだ。この対象aの果たすべき機能というのは、欲望を生み出し繰り返し維持し続けるということである。そしてそのことで欲望は実現し満足させられるのである。しかし問題はここで終わらないのだ。対象aによって欲望が実現し、その意味で満足させられるとして、それで十分なのかということである。つまり対象aによって欲望を実現させることで、我々は生きていけるのかということなのである。ラカンの精神分析においても象徴界、想像界、現実界という三つの基本的な領域が存在していて、我々が確固たる主体性を維持するためにも、また対象aを機能させるためにも、象徴的なものについて検討する必要があると思われる。

第七章 父なる存在

対象aが欲望を実現させ充足させるといっても、あくまで個人的なものでかつ不安定なものである。敢えて言えば、自らの存在が確保されて安定した状態でこそ指向されるべきものであ

る。つまりある意味余裕のある状態が前提とされるのだ。このことについて理解するために、ラカンにおいて何故象徴的なものが求められているのかを考えておこう。例えば欲望の実現のためには金銭が必要だと考える。あればある程度欲望が実現されると考える。あるいは欲望の逆転が生じ、金銭を得ること自体が欲望と化するということになるかもしれない。しかし厳密に言うならば、金銭特に紙幣は単なる紙切れであって、それ自体に価値はほとんどないと言っていい。つまり実体的には無価値なのであるが、ある共同体においては価値あるものとして象徴化され流通するようになるのである。ここにおいて本来価値のなかったものが価値あるものとして構築されることになる。またこれが新たな欲望を生み出し、価値を作り出していくということにもなる。このような貨幣体系、経済の仕組みが前提として確立されていなければ裕福になりたいという希望も持つことは出来ないのだ。このような象徴が必要なのは何も貨幣体系に限らないのであって、フロイトが『快樂原則の彼岸』で考察したように、母親の不在を子どもが「フォルト」と「ダー」という言葉によって象徴的に捉え、主体的に処理したという事例も考え併せることが出来るだろう。このような象徴が我々にとって必要なのは、本来は空無であったものに意味を附与し、そこに社会的価値を持たせることによって、我々の個人的生活が安定したものとなる前提としての基礎を築くことにあるのだ。象徴化というのは主体が自らの欲望を実現させていくためには必要な条件なのである。例えば『ナジャ』においてブルトンがその自己同一性を求めるためにナジャをその対象として選んだとしても、その肝心のナジャ自体も不安定な存在であって、ブルトンに救いを見出さなければならなくなる。このような過程においては不安定で、最終的な結論は得られないことになる。そこでラカンは対象の不在のため父なる存在においてその可能性を見出そうとするのである。ここにおいて父なる存在とは実際の父親であることを意味しない。しかし実際には現実の父親がその役割を担うこともあり、我々は『ナジャ』に父なる存在を探ることになる。『ナジャ』においてブルトンの父親的存在は皆無であるが、ナジャにとっては父親もしくは父親的存在について言及されている。10月4日、ナジャはブルトンに自分の名前を告げた後、自分の父親について話し始めるのである。「とても弱い人！どんなに彼がいつも弱かったかあなたが知っていたなら。（中略）私は彼がとても好き。私が彼のことを考えるたびに、彼がどれ程弱いかわかるたびに…」(PI p.686)

ここにおいて父親らしくない弱い父親の存在が明らかになる。父親についての言及はこの箇所だけなのだが、ナジャとの関わりのあった人物の中には父親的存在が何人か見受けられる。10月5日に、父親的存在の男性の話になる。「次に彼女は私に彼女が持っていた二人の友達の話をする。一人は、パリに到着した時、彼女が普段は《大親友》という名で呼んでいて、こんな風に彼女は彼のことを呼んでいたが彼はいつも彼が誰であるかを彼女が知らないことを望んでいて、彼女は今も彼に対して底知れぬ尊敬の念を示していて、彼は75歳近くの男で、長い間植民地に滞在していて、彼は彼女に出発する時セネガルに戻ると言ったのだ。もう一人は、アメリカ人で、彼女には非常に異なった感情を引き起こさせたように思われる。」(PI p.690)

この人物はナジャのことをレナと呼んでいて、それは亡くなった娘を思い出すためだと言うが、父親的存在ということではあってもそれ以上の役割を果たしていないように思われる。ところが10月10日にナジャはこの「大親友」について次のように話し始めるのだ。ここにおいて

この男性は父親的存在であるかのように思われるが、実はそうではなかったことが明らかとなる。「彼女は彼女が《大親友》と呼んでいて、彼女が今あるのはその人のおかげであると私に言うあの男のことを私にまた話す。《彼がいなかったなら私は今売春婦の中でも最低だったでしょう》。私は彼が毎晩、夕食後彼女を眠らせていたことを知る。彼女はそのことに気付くのには数か月かかったのだ。彼は彼女に一日をどのように使ったかについて全て詳細に語らせ、良いと判断したことを称賛し、それ以外は非難していた。そしていつもその後は頭の中で局限された身体的な不快感が彼女が彼に禁止されていたはずのことをまたするのを妨げていたのだ。この男、白いひげで顔がわからなくなっていたが、彼女が彼について何も知らないでいることを望んでいて、彼女には王の印象を与えている。彼女が彼と一緒に入った至る所で、通りがかりに非常に敬意のこもった関心の動きが起こっていたように彼女には思われた。しかしながら、その時以来、彼女は地下鉄の駅のベンチの上にいる、彼をある晩再び見かけたのだが、非常に疲れて、非常にだらしく、非常に老けて見えた。」(PI p.707)

確かにナジャを支配していたということで、父親的存在であったことは明らかである。しかし同時に何か得体の知れない存在でもあって、最後にはどのような存在であったかが明らかとなる。ここにおいて指摘しておかなければならないのは、その男性が父親的存在であったかどうかというよりも、ナジャにとって父親的存在が必要であったということである。むしろ『ナジャ』においてはブルトンがナジャにとって父親的存在ではないにしても依存的存在であったことは確かで、ただブルトンの側の認識はというととても父親的なものではなくてそれはブルトンがナジャを次のように捉えていたことから明らかである。「私は、最初から最後の日まで、自由な精霊、ある魔法の実践が一時的に自分に引き付けることは出来るが、従うことは問題になり得ないだろうこれら空気の精の一つのような何かとしてナジャを見なした。」(PI p.714)

以上のことから明らかのように、『ナジャ』において父親的存在はいない、いたとしてもまがいものようであると言えるだろう。もちろん我々はここにおいて父親的存在を見出そうとしていたわけではないが、ただそれを見ておくことは必要であって、なければならぬ次の段階を考えなければいけないのだが、知っておかなければならないのはナジャを好意的に見る視線を持った他者の存在の有無である。ブルトンはナジャが精神病院に入れられたことに関連して、もしナジャが裕福であればもっと別の形になっていたであろうとした上で、次のように書いているのだ。「しかしナジャは貧しかった、そのことは我々が生きている時代にあっては、彼女が良識とか良俗とかの愚かな規範を全くきちんと守らないでおうと思う時点で、彼女に有罪判決を出すのに十分なのだ。彼女はまた孤独だった。」(PI p.740)

ナジャの唯一の理解者と言えばブルトンということになるが、そのブルトンに見捨てられた瞬間、ナジャは存在論的整合性を持たないただの女性になってしまう。仮にシュルレアリスムが支配的な原理である世界においては、ナジャは謎の女性として存在する。しかしこの現実にはシュルレアリスムが支配原理となっているわけではないし、敢えて言えば『ナジャ』がシュルレアリスムの空間として提示出来るのみである。それでもナジャはブルトンの欲望を喚起して墮落させてしまうというよりも、むしろブルトンがその欲望を浄化することによって消滅させられてしまう。つまりナジャ自体としては、存在論的整合性を持った女性として存在すること

はなく、ただブルトンの欲望の対象としてのみ存在し得るにすぎないのである。ナジャは謎の女性としては充分ではない。ナジャはブルトンの欲望をかき立てながらも、最後にはブルトンを拒絶する女性でなければならない。しかしそのためにはナジャが自ら描く想像上の自分自身と同一化していなければならないし、自ら理想とする人物像を持っていなければならない。そのためには自分自身を好意的に捉える他者の視線が存在しなければならない。この場合他者とは現実において生身で存在する他者のことではなくて、象徴的なものとして捉えることの出来る他者である。鏡像によって自分自身を形成し主体性を確立するという想像的な手段は不安定なものであり、全く別の似ても似つかない鏡像を突き付けられたとして、これは自分ののではないと拒絶する程確実なものではない。ナジャにとって必要なのはブルトンに愛され続けることではなくて、ブルトンが存在していなくても自分を整合性を持った存在として認識出来る象徴的次元における他者の視線に他ならない。その他者とはラカンの言う「大他者」のことである。

第八章 大他者とは何か

大他者について問題にする前に、論点を整理する意味で、大他者とは何かおよそのイメージを提示しておこう。例えばカフカの状況において大他者はどのように機能しているか。『審判』において主人公であるKは、法廷が多少問題があるように見えても、立ち向かっていくべき実体として捉えている。つまり法に則って自分の正当性を主張すれば理解してもらえる、自分の無実証明出来ると認識しているのである。しかしそのような試みはことごとく失敗する。法廷はいかにも法廷であるかのようになっているが、実質的にはそのように機能していない。Kがいくら法廷にいる人物に話しかけたところで意思が到達することはないのである。ならば誰に対して語りかけるべきであったのか。敢えて言えば大他者であるが、生身の人物として特定することは難しいだろう。それではわけのわからない存在によって支配されていると言えるのか。少なくとも法廷にいる人物はその大他者が誰か知っているのだ。この問題を解明するために、一旦ラカンを離れて、ドゥルーズを持ち出してこよう。ドゥルーズは自由であることを志向した哲学者であると考えられるが、自由を阻害する要因が現実には数多くあることを指摘していた。ドゥルーズは大他者という言葉を用いていないが、その理解にとっては有益である。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは『ミル・プラトー』において、権力関係について次のように書いている。権力関係は支配する者される者が明確に区別された単純な構造ではないのだ。つまり、「我々はそれを既に見たのだが、ミクロ・ファシズムとは特異性を持っていてマクロ・ファシズムの中で結晶化することがあるが、自分の利益のために順応性のある線上で漂ったりそれぞれの小さな細胞を浸したりすることもあるのだ。」(MP p.279)

これはあたかも権力が社会全体を覆うかのような印象を与えるが、実はそうではなくて、至る所に存在しているのだ。「ファシズムを危険なものにするのはミクロ政治学的あるいは分子の力である、何故ならそれが大衆の動き、つまり全体主義的な組織というよりもむしろ癌にかかった身体だからである。アメリカ映画がしばしばこれらの分子の発生地、徒党や、ギャングや、党派や、家族や、村や、地区や、乗り物の、誰をも寛大に扱わないファシズムを描き出した。包括的な質問、つまり何故欲望はそれ自体の抑圧を欲望するのかとか、どのように欲望は

抑圧を欲望し得るのかに対して答えを出すためにはミクロ・ファシズムしかないのである。」(MP p.262) つまり権力とは社会の上部や外部から襲ってくるものではなく、我々の身近にあるということなのだ。そしてそれがいかにして形成され機能していくかを次のように説明している。「それぞれの権力の中心はまた分子状態で、ミクロ論理的な組織に対して行使されそこでは散乱した、ばらばらの、減速された、小型化された、絶えず移動させられ、細かい切片によって作用し、細部そして細部の細部において効力を現わすものしか存在しない。フーコーによる《規律》もしくはミクロ権力の分析は(学校、軍隊、工場、病院、等)これらの《不定性の発生地》を立証しているがそこでは再編成や集積だけではなく、気晴らしの外出や逃走が対立しているし、そして逆転も起こるのである。それは最早小学校の先生というもの(下線原文)ではなく、生徒監督、優等生、劣等生、門番などであったりするのだ。それは最早将軍ではなく、下級の将校、下士官、私の中の兵士、頑固者もそうだし、自分の性癖、性格などの対極、葛藤、力の関係を伴った各自なのである。そして准将や門番でさえ、よりよく理解してもらうためにだけ引き合いに出されるのである。というのも彼らはモルの様相とともに(下線原文)分子の様相も持っていて、将校、地主がまた既に二つの様相を持っていたことを明らかにするからである。固有名詞はその力を失うが、これらの識別出来ない地域に入ると新しい名前を見出すようだ。カフカ風に言うなら、それは役人のクラムではなくて、恐らく彼の秘書のモームス、あるいは別の分子のクラムなのであり、その違いは、彼らの間そしてクラムとともに、それらが最早指定することが出来ないだけ一層大きなものなのである」(MP pp.274-275)。

つまりこの社会において何らかの欲望を抑圧する装置として働くのは個々の他者というわけではなく、他者たちとその背後に存在する何かが一緒になって大他者として機能することになるのだ。従って個々の他者の言動は各個人の主体的なものではなく、あたかも他者たちの総意であるかのように大他者を代弁するものとして表出されるのである。これは社会を形成する上での根拠となる法律や社会通念といったものに基づくものではなく、表面的にはそのような形をとりつつも、実際のところは理解不可能な暴力的な欲望に支配されているのである。そこには主体が対峙すべき他者は存在していない。従って論理的知性的に対応しようとしても、不可能なのである。この大他者の視点で『ナジャ』のテキストを読むとどうということになるか。例えばナジャが精神病院に入れられたことについて、ブルトンが周囲の人たちからブルトンにも責任の一端があるかのように指摘されるところがある。「恐らく彼らは彼女の人生における私の介入、これらの考えの展開に実際に好都合な介入に、ものすごく決定的な価値を帰するだろう。《ああ、何てことだ》とか、《そうだろうね》とか、《私もそう思っていたんだ》とか、《このような状況では》とか言う人々、つまり全ての低級な愚か者に関することに対しては、私はそれをそっとしておく方がいいというのは言うまでもない。」(PI p.736)

これらの他者たちが大他者であるというわけではないが、背後には大他者が存在しその線で発言しているように思われる。恐らくブルトンはこの点について自覚的であって、対話の不可能性を認識し、何も言わないという対応をとっているのである。ただブルトンが事例として挙げているパリのサン・タンヌ病院のクロード教授⁴⁾の患者に対する態度は、一人で大他者を体現しているような印象を与える。このように『ナジャ』においては現実との関わりにおいて、

ということはブルトンとナジャはいかに現実の世界から離れていたかを如実に物語るものであるが、既に述べたような点でしか大他者の存在を指摘することが出来ない。論理の展開上あたかも大他者とは抑圧的な存在であって必ずしも好ましいとは言えない印象を与えかねないのであるが、本質的にそのようなものではない。対象aによって欲望を再生産し実現し続けるためには、安定した形で主体の存在が前提としてなければならない。そのため社会との整合性を確保するために大他者の支えが必要となるのである。仮に大他者の求めるものが論理的でも倫理的でもなく単なるゲームにすぎないのであれば、そのゲームの規則を知っておく必要があるのだ。何もそれを象徴的なものとして自分の中に取り入れる必要はなく、それを知ることによって大他者の視線で自分を捉えることが出来るようになるのだ。ここにおいて自分にだけわかる自己流の美学を持ち出してきてはならない。大他者によって理解出来ないということは、それは単なる対象aとなってしまう、現実との整合性を持たず、現実における支えを失ってしまうことになるのだ。大他者の視線を確保することこそ、対象aを有効に機能させることの条件になっているのである。それでは『ナジャ』における大他者とは何なのか、ブルトンはそれをどのように設定し発見したのか、我々はその存在について考察していかなければならない。

第九章 大他者の視線を形成する読者

『ナジャ』が存在し得る条件とは何か。これを単なる恋愛小説として見ることは出来ない。何故ならブルトンはさておくとして、ナジャに同一化することは難しいからだ。それでは何がこの『ナジャ』を成立させているのか。それは我々読者の視線である。これは読者がいなければテキストとして存在しないという、一般的な原則を指摘しているのではない。シュルレアリスムという新しい運動を機能させるための前提条件なのである。そのためにブルトンは様々な配慮をしている。これこそブルトンが改訂版に付け加えた「序言」の中で明らかにしている「とても多くの年を経て、多少なりとも形式において本をよりよくしたいという本の著者の自己満足」(PI p.645)なのである。それは読者にとってわかりやすく読みやすいテキストを心掛けるということである。つまり「用語においてより多くの適合とその一方でより多くの流暢さを少し手に入れたいと思うのは恐らく禁止されていない」(PI p.645)。

そしてこのように表現に配慮することによって、読者も増えるだろうということになる。つまり「このような書きものの故意の窮乏は恐らく通常の限界の向こうに消失点（下線原文）を押しやることで支持の更新に貢献しただろう。」(PI p.646)

これが『ナジャ』成立の大前提なのである。そしてまたこのような配慮は『ナジャ』のテキストの中にも随所に見られるが、ここで言う配慮とはただひたすらわかりやすくということではなく、本来がシュルレアリスムであり、ブルトンとしては自らの主観性に従ってテキストを成立させたいところであるが、それでは読者に敬遠されるだろうからということでの注意喚起のようなものである。まずブルトンはシュルレアリスム的な体験を挿話として語るのであるが、その始めに次のように書くのだ。「この領域で私に体験によってわかる機会が与えられたことの包括的報告を私に期待しないこと。(中略)私は前もって決められた順序などなく、残存しているものを残存させておく時の気まぐれに従ってそれについて話そう。」(PI pp.652-653)

あるいはまた「ここかしこに、間違いや些細な書き落とし、更に何らかの思い違いや正真正銘の失念が私の語っていること、全体的に、確認を要するのは出来かねることに疑念を引き起こすなどどうでもいいことだ。」(PI p.653)

このような形でシュルレアリスムの体験が語られ、その後ナジャの物語が始まるのであるが、一旦物語が終わった時点で『ナジャ』を完成させてしまうのではなく、ブルトンはそれに対して距離を置き、一つの作品として提示すべきかどうかとここに書かれているものは一体何だったのかという思いを連ねることによって、ブルトンの主観的な視点が読者の視点と合うように繰り返し同一化を提供するのである。「本のような何かを準備する時間があり、最後まで来た時に、そのものの運命もしくは結局のところそのものがもたらす運命に興味を持つ手段を見つける全ての人を（これは一つの言い方だが）私は羨ましく思う。途中でそれを諦める本当の機会が少なくとも一回はその人にあったということを私に信じさせてくれないか。」(PI p.744)

「もし私が、私が持っていると確信している我慢強いそしていわば客観的な目で、この物語を読み直したとして、私自身の現在の気持ちに忠実であるためには、私がそこに残しておくものがほとんどわからないのだ。私はそれをどうしても知りたいとは思わないのだ。」(PI p.746)

果たしてこれはブルトンの本心だろうか。いずれにせよこのことによって、ブルトンは仮に『ナジャ』に対していささか距離を持つようとしていた読者の視線と同一化することが出来るわけである。ここにおいてブルトンの意図は明確だろう。『ナジャ』についてのテキストであるにも拘らず、つまりナジャといういささか変わった女性についての物語であったのだから、理解に苦しみとか同一化出来ないと思うのはナジャに対してであって、介入の仕方にいささか問題があるとしても、ブルトンに対してではないはずなのである。ブルトンは読者の視線と同一化したいのである。ブルトンは『ナジャ』のテキストを一旦中断した後に、再び書き始めるまでの間希望を持って生きてきたと述べているが、それについて触れた箇所でも、「信じた人は私を信じるだろう」(PI p.746)と書いていて、自分にとって好意的な読者の存在を望んでいることがわかる。そしてこのことは35年経った段階で、ブルトン自身が他者の視線を獲得したことを意味しているのだ。当初の段階ではあまりに奇異な話の展開では読者に受け入れられないだろうという著者側の配慮とだけしか思われまいだろうが、改訂版においては当時の状況をあたかも懐かしむかのように見つめる。従って問題となっているのは『ナジャ』のテキストであって、35年経った段階でも読むに値するものであるかの検討が行なわれたかのように見える。しかし実情は逆なのだ。問題となっているのはテキストそのものよりも、35年経った段階でこのテキストを見ているという事実なのである。つまりここにおいてブルトンは他者としての視線を獲得していて、それを可能にしているものはシュルレアリスムに他ならない。シュルレアリスム運動の初期ではなく、歴史的に一定の評価を得たという背景を考慮に入れた時にはじめてこのブルトンの視線を理解出来るのである。この意味において、つまり改訂版の『ナジャ』を手にした時に、ナジャの物語が単なる物語ではなくメタ物語として理解出来ることになるのだ。それでは初版における物語と改訂版におけるメタ物語の距離の違いはどのようにして説明されるのか。初版の『ナジャ』にあるのは、ナジャに魅惑されたいわば素朴なブルトン

の視線である。ブルトンの視線を通してはじめてナジャの魅力が出現するのであって、直接ナジャその人に向かうわけではない。ところが改訂版の『ナジャ』にあるのは、ブルトンがナジャを見ているという視線をブルトン自身が見ることなのである。これこそラカンが『精神分析の四つの基本概念』の中で述べている自己鏡像という幻想である。これがあくまで幻想にすぎないのは、ラカンも言うように視線と眼の二律背反が解決していないからである。ブルトンは過去のブルトンの視線を見ることが出来る。しかし過去のブルトンは見返してくるのだろうか。この問題をどう処理するのか。この改訂版が果たす機能とは、眼と視線の二律背反を無効にしまうことなのだ。過去の思い出としてかつてのブルトンの視線は現実のものではなく、いわば想像的なものになっている。ここにおいてブルトンはかつてのブルトンがナジャを見ているその視線を再現しているような幻想を抱く。過去の時点においてブルトンは例えばナジャから見られていたという事実を忘れさせてしまう機能をこの幻想は果たすのだ。つまり幻想が幻想であるためには、ブルトンが見ているという事実は秘密にされなければならない。仮にブルトンが見ているということ自体見られていたとしたら、その時点においてブルトンはただの他者になってしまうだろう。つまり改訂版においてブルトンは大他者として機能しているのだ。ブルトンは『ナジャ』の「序言」において「現在においてそれを再現することが出来ないので、ある感情的な状態の表現を時間において手直しする試みは、必然的に矛盾と挫折という結果に終わる」(PI p.645)と書き、また「35年の後に(鏝が深刻だ)」(PI p.646)と書くことでテキストの変更に言及しているが、敢えて変更を加えるのだから、読者にとっては読みやすくなるだろうとか理解しやすくなるだろうと予想する。ところがこの変更は失敗するかもしれないし、そもそも過去のことであるからと付け加えるわけで、ブルトンの視線はかつてのブルトンを眺めるとともに、このテキストに対してどのように反応するかという読者の視線も意識せざるを得なくなる。事実ブルトンは「序言」において読者の視線に対して語りかけているのである。つまりブルトンは過去のブルトンがナジャを眺めている視線を対象として幻想に浸っているだけではないのである。いわば幻想を支えるとともに読者の視線をも対象にするというブルトンの視線はどのようにして生み出されるのか。ここにおいてシュルレアリスムを背景としたブルトンが大他者の視線を持っていることを理解するのだ。

第十章 無意識はどこにあるか

大他者に支えられて対象aを追求する。対象aは捕まえようとしても捕まえられないものではないから、対象aをナジャとして捉えようと、ナジャの物語においてブルトンとナジャが別れるのは必然的に見える。『ナジャ』はブルトンが体験した事実を基に書かれているのだから、これ以外の展開はないわけだし、ナジャの精神状態から考えれば遅かれ早かれ精神病院に入ることになり、いわばブルトンの意志と無関係に別れに至ると考えることが出来るわけだ。ところが実際にはどのような展開になったかわからないわけであるし、どのような展開もあり得たということになる。この問題に答えるためには、物語を結末から見ていくしかない。つまりブルトンとナジャは別れるという結末が最初にあり、それに向かって出来事が起きるということなのである。これはあたかも物事が全て決まっているかのように進行するわけだが、知っているの

はブルトンだけである。ブルトンはナジャと出会うのであるが、最終的には別れることを既に知っている。ところがブルトンは実際には別の展開もあり得たのではないかと思っているように見える。例えば10月7日の最初の記述である。「私はひどい頭痛で苦しんだ、正しいかどうかは別として、私はあの晩の心の高ぶりそしてまた私がしなければならなかった注意や適応の努力のせいにする。しかしながら、午前中、私はナジャがいなくて寂しかったし、彼女と会う約束をしなかったことを後悔した。私は私に不満である。」(PI p.701)

ひょっとしたらブルトンはナジャと別れないのではないかと思わせる箇所である。対象aなどという幻想を作り出して、そういう視線でナジャを見るから正しい判断が出来ないのであって、幻想など不要だと結論付けるのは間違っている。まさに幻想が現実を構造的に成立させているのだという事実気付くべきなのである。フロイトが『幻想の未来』において述べていることも同様の趣旨である。この意味において、つまり幻想を成立させるために、ブルトンはナジャが本当はいかなる人物であるか知ってはならないのである。もっともブルトンは「本当のナジャは誰なのか」(PI p.716)という問いかけをし、いくつかの考えられる人物像を提示しているが、明らかにブルトンは知っているのである。しかし知っていることを明らかにすれば、幻想は壊れてしまう。従ってブルトンは正解を示さず、傍観者の役割に甘んずるのである。ところがブルトンは実際はナジャのことを愛していなかったというのではない。周囲から見ればブルトンとナジャは愛し合っているかのように振る舞い行動していたわけで、そのことによって世間的には認識されるわけである。もしブルトンが本当はナジャのことを愛してはいないのだが、愛している振りをしているだけだと確信していたなら、明らかな自己欺瞞である。大他者による象徴的な世界において、ブルトンとナジャは愛し合っているのである。何故それが言えるのか。それはブルトンがそう望んでいるからである。ブルトンは既に指摘したシュザンヌ・ミュザールと知り合った段階で『ナジャ』の第一部と第二部の原稿を見せているのだが、ブルトンはシュザンヌにナジャのことを知ってもらいたかったのである。それは何故か。ブルトンは出来上がった原稿を、いわば出来不出来について聞きたいがために見せたわけではない。ブルトンはシュザンヌに見せるために『ナジャ』の原稿を書いたのだ。『ナジャ』の第一部と第二部を書き終えた後にシュザンヌに出会っているにも拘らずだ。つまりブルトンはシュザンヌに原稿を見せることによって、抑圧されていた欲望を実現するのである。自己同一性を扱っているドゥルイ氏の話シュザンヌに聞かせたいと思っていたことも同様である。ブルトンはシュザンヌに自己同一性の鏡像を見出すのである。ところがナジャの物語においてはナジャとの関係を断ち切る判断をしたのはブルトンであったのだが、シュザンヌとの関係が破綻してしまうのは元愛人のエマニュエル・ベルルの介入という全く外的な要因なのである。つまり自己同一性の鏡像の問題というのは、確かに自分以外の存在との関わりということで、決して心の中だけで最初から最後まで終わってしまうものではないにしても、極めて内面的な作業だと思われるのである。ところがついに自らの鏡像を見出し、この現実にある一定の位置を占めたと思った瞬間、それが無効になってしまうのだ。心の中では依然として有効に作用しているのだが、現実にはそのように見なされないのである。つまり単なる空想の世界の話ではなくて、現実には他者と向き合ってそこに間主観的な関係を築いているにも拘らず、現実的には全く別の

結果になってしまったということである。ブルトンとシュザンヌについては全く変わっていないにも拘らず、そこに現実の別の要因が存在することによってブルトンとシュザンヌの象徴的地位が全く変わってしまったということだが、この本質的とも言えない厄介な問題をどのように扱うかということである。もしブルトンがシュザンヌだけを見て、外的要因に目を向けなければ、マルグリット・ボネが指摘しているように、ブルトンは「愛という夢の真実の中に」(PI p.1563) いることになる。例えば無実の人が投獄されていたとして、この投獄されている人物を規定するものは何か。ラカンの「無意識は外にある」というテーゼを参考にして考えるなら、社会を形成している形式的な象徴的構造が主体を規定しているわけであり、いわば偶然の産物であるかのように思われるがそうではない。その外部にある象徴的構造は既に機能していたのである。つまり無実の人は無実であるにも拘らず投獄されたのではなく、投獄されるべく構造化されていたのだ。そしてそのような外部もこの外部に留まるのではなく、主体の内部へと侵食しているだろう。従ってブルトンがシュザンヌを鏡像として完成させたいなら、シュザンヌがこの現実において対象aとして捉えられる以上、最早シュザンヌを目標としていては目的に達せられないだろう。シュザンヌがどちらに行くかについては全く外部の出来事なのである。つまりブルトンは外部の出来事について思い通りに支配操作することは出来ない。ある時はシュザンヌを手に入れたかのように思う。ところがしばらくすれば自分の手から離れて行ってしまうのだ。そしてそれを決定するのはシュザンヌ本人ではなくて、ラカンの言えば「他者」なのである。もちろんだからといって、他者は誰かと探してみても見つかるわけではない。ラカンが「大他者は存在しない」と言っているように、確かに機能としては何かを目的として達成しようとした時に思わぬ偶然的な動きが起こり、意図したのとは全く別の結果になった場合、誰かが故意に妨害したとか介入したとかいうのではなく、目に見えない作用が働いたという意味なのである。確かに結果が生じた段階で、そこから遡及的に原因を見ていくという作業は必要であり可能であるだろう。この問題を解決するために、ブルトンは無意識に頼るのである。心理的問題ではない。ブルトンは対象aとしてアヴィニョンの街や道路標識を提示した後で、無意識をあたかも唐突に持ち出してくる。「私に確かな唯一の行動を引き起こす活発でよく響く大いなる無意識が永遠に私である全てのものを意のままにせんことを。私は勝手にここにおいて改めて私が無意識に注いでいるものをそれから取り戻す全ての機会を自分から取り上げるのだ。私は今一度無意識だけを認めたいし、私はそれだけを当てにしたいしそして私の眼の中にあることを私は知っていて夜間の包みにぶつかることを私に免れさせてくれる輝く点を私自身見据えながら、広大な防波堤をほとんど心ゆくまで踏破したい。」(PI p.749)

ここにおいてラカンの言う眼と視線の関係が示されているだろう。この二律背反を解消するためには、ただ単に自分の欲望が何であるかを気付くだけでは不十分である。他者の場所から欲望することが必要である。もちろんそれは他者の欲望を自分の欲望として捉えるというよくある図式ではない。真に解明されるべきは、他者は何故どのような欲望を抱いているのかということなのである。他者の欲望を知った上で、自らの欲望を位置付けるのである。

第十一章 ブルトンの消滅

『ナジャ』の最後に「ある日の朝刊はいつも私の消息を私に知らせるのに充分だろう。」(PI p.753) という一文が出てくる。これは何を意味するか。新聞の記事として書かれたものには元型があることはわかっている。マルグリット・ボネによれば、ドーンDawn号という水陸両用の飛行機が、1927年の末に遭難したという事故の記事に基づいている。アメリカのウィルソン大統領の姪と3人の乗組員がクリスマスの夜中に太平洋横断を試みるはずであった。実際にはニューヨークを12月23日の夜に発っているのであるが、目的地に到着することはなかった。12月24日から30日までの新聞は消息について連日一面で報道していたのだが、その中には飛行機から発せられたと思われるメッセージも載っていたのである。その中の12月27日の「ジュルナル」紙の記事からブルトンは引用しているのだ。ブルトンはこれらの記事に心動かされるものがあり、どうなるかという期待と不安が当時のブルトンの心境と一致していたと考えられる。また事故に遭った飛行機の名前がDawnというのも象徴的で、ブルトンがテキストの中で示している道路標識に書かれていたLes AubesもDawnのフランス語なのである。このようなことからまさに『ナジャ』が結末を比喩的に表現しているものとして訴えてくるのである。これに応えるかのように、つまり1927年のクリスマスの35年後の1962年のクリスマスにブルトンは「序言」を書くことになるのだ。ところがここで疑問が生じてくる。確かにドーン号の遭難事故は当時のブルトンに大きな影響を与え、自身の心境と同じくするものがあり他人事ではなかったというのは理解出来る。しかしながら問題となっているのがナジャやシュザンヌの消息ではなく、ブルトンの消息となっているのは何故なのか。ブルトンが『ナジャ』を書き始めるにあたってアンゴの館を人から借りているのであるが、つまり「私が邪魔されたくないと思っているような時、森のはずれの、やぶで人工的に隠された小屋の中にいるために人が私に提供してくれたアンゴの館」(PI p.653) ということなのだが、これを提供してくれたのがベルル夫人であって、シュザンヌ・ミュザールの愛人であった編集者のエマニュエル・ベルルの夫人である。ブルトンがシュザンヌと理想的な関係を築き、エマニュエル・ベルルが介入してきた時対抗出来なかったというのもこのあたりに原因があるのかもしれない。社会を構成する間主観の関係という構造の中に欺瞞があるとして、それに対抗するためにはどうしたらいいのだろうか。その構造自体を変えてしまうということは不可能だろうが、少なくとも自分を見失わない方法はそのような関係から一定の距離を置くというものである。我々はこのにおいてカフカの『審判』の中で語られる「掟の門」という話をラカン的に捉えることで検討していこう。この話はある男が中に入りたいということである掟の門前に立つのだが、門番によって入ることを拒否される。将来はどういうことになるかわからないが、とにかく今は駄目だと言われる。この話を真に受けてその男はいずれ入れるのだろうという期待も込めて門前に留まるのであるが、その男が老人となりついには死に至るまでその門の中には入れなかったのである。そしてその男の死に際して、その門番は男のためにだけこの門があったのだと言い門を閉じて立ち去って行くのである。その男からすれば入りたくて来ているわけでもなく、入れという要請があったからこそ門前にいるわけで、その意味で象徴的な間主観の関係に位置しているのである。ラカンも言うように、主体はそれとして実体論的に存在しているわけではない。確実にあると保証されて

いるわけではなく、その意味で存在しないとも言えるのである。そこで主体を取り戻そうとすべく対象に向かうことが主体的な動きとして存在する。間主観的關係の中に入れという要請があり、それに応えないと主体として存在出来ないとすれば入らなければならない。それに今は駄目でも将来はそうではないかもしれないという期待も持たされるのである。ここにあるのは常に先延ばしにされた可能性らしきものである。そもそもその男は門の中に入りたかったのだろうか。その欲望が存在したのだろうか。ラカンの「己の欲望に譲歩してはならない」というスローガンに従うならば、仮に欲望に譲歩してしまうと主体も主体として成立することが難しくなる。しかしカフカの「掟の門」が意味するところは、結局のところ門の中には入れないのであり、門の向こうに何か秘密が隠されているかということと何もないということである。ここから出てくる結論とは、仮に欺瞞に満ちた象徴的な間主観的關係の犠牲になりたくないと思えば、カフカの「掟の門」を例にとれば門の中に入ろうとしないことである。このような出来事はちょっとした手違いとかドーン号の遭難事故のように常に起こるものではないにも拘らず、何故かありそうに思えてしまう理由はどこにあるのか。それはあるかのように見えているが、実は存在しないということを我々が薄々知っているからである。このような共同体の中にあって騙されないとするれば、全く別の象徴的体系を持ち出してくる他ない。『ナジャ』のテキストの中においてはナジャそのものである。ブルトンはあくまで共同体側の人間であるが、ナジャに同一化しようとはしたのである。ブルトンの言う「この死に物狂いの追求」(PI p.714)とは要するにこのことであって、どこまでそれが出来たかについては懐疑的である。例えば『ナジャ』のテキストの次の箇所から、その一端を窺うことが出来るだろう。「これを最後に、地上からかくも遠く離れて、我々の奇跡的な茫然自失が我々に残しておいた短い間隔の中に、同時に投げ出された我々は、古い考えや果てしのない人生のぼんやりした残骸を越えて信じられない程一致したいくつかの視線を交換することが出来たのは何故なのか。」(PI p.714)

ナジャは精神病院に入ることによって、共同体の外側に位置することになる。それではブルトンはいかなる場所に位置すればいいのであろうか。問題であるのは「大他者」が象徴的な間主観的共同体の側にいるということなのだ。ナジャの物語においてブルトンはナジャと出会い、結局は別れることになったのであるが、結末はどのように変化したのであろうか。ここにおいてブルトンはナジャとの出会いを体験することによって現実的な視座から超現実的な視座へと変わったわけではないのだ。結局はナジャに出会う以前の、ナジャのいない世界へと戻っただけなのだ。つまりナジャによって提供されていた別の象徴的体系が消滅したことによって、再び間主観的共同体に位置することになったのだ。ただ象徴的關係に騙されないために一定の距離を置く。つまりは一時的にせよブルトンは消滅するという立場をとることになるのだ。

終章

間主観的共同体から一定の距離を置き一時的にせよ消滅してしまうといっても、文字通り存在しなくなることはない。フロイトの理論が示すように、生き続けることが至上の命題なのである。しかしそれを前提にして考えるなら、後は心理的な問題なのだろうか。ブルトンが自己同一性を求めてナジャを志向しても、ナジャ自体も自分とは誰であるかを問わなければなら

ない存在である以上、この問いかけはブルトンに投げ返されるか、あるいはブルトンはナジャとは別の女性を設定して更に自己同一性の問いを続けるかになり、論理的には無限となる反復である。ところが「君」なる女性が現われ、無限に続くかに見えた連鎖は終止符を打たれる。つまり「私が知っている全てというのはこの人物の置き換えが君のところで止まるということであり、何故なら何ものも君に置き換わることは出来ないし、私にとってこの謎の継起が終わることになっていたのはるか昔から君の前でだったからである。」(PI p.752)

これは論理的帰結というわけではなく、「君」のところで終止符を打つということは、「君」は誰にも代え難い存在であるというブルトンの心情を表わしたもののなのである。仮に論理的に考えていくなら、あるいは「君」のような存在が現われなかったとすれば、本来無限であることを運命付けられた連鎖は最終的には神へと至るだろう。神こそが存在に至らしめたわけであり、主体の保証となるのである。この意味においてブルトンが恩寵を問題にしていることが理解出来るのである。ブルトンは「他の全ての人たちの中であって私はこの世に何をしにやって来たのかそして自分の責任でしかその運命に応えることが出来ないからには私はいかなる唯一無二の使命を担っているのか」(PI p.648)を問題にしているが、この考え方自体神との関係を前提とするもののように思われる。そしてそれを語るにあたっても、次のような方針を提示するのだ。「私の側からのいかなる働きかけにも応じることなく、時折私に起こったこと、疑いをかけようもないやり方で私に起こり、私が対象である特別な恩寵と失寵の範囲を、私に教えてくれることを、ここでは易々と思い出すだけにとどめておこう。」(PI pp.652-653)

確かに全ては論理的に進行するのではなく、物事は偶発的に起こる、少なくともそのように見えると考えるなら、そこに神そのものとは言わずとも神学的次元を持ち出してくることになるだろう。『ナジャ』においても神的なものがなくはないのだ。そもそもナジャはブルトンにとってスフィンクスの存在であって、ナジャの前身とも言える「新精神」における謎の女性も「一人の魅力的な若い女性の姿になったこの真のスフィンクス」(PI p.691)として表現されるし、ナジャに関しても「私はスフィンクスの足もとで恐れおののかかれた男のように彼女にとっては黒く冷たく見えていたのだということを思い出すのだ。」(PI p.714)ということで、スフィンクスに擬せられている。このスフィンクスは、例えばブルトンをシュザンヌに出会わせながらも残酷に取り上げてしまうのかもしれない。この必ずしも寛大で優しいとは言いかねる神は、『ナジャ』のテキストにおいてメタ的な存在として捉えられる。表面的には秩序立っているかに見える象徴的体系は、偶発的な出来事によって欺瞞として機能し始めるのである。それこそが象徴的秩序の強制であるが、ミシェル・フーコーはこのような自己実現の方法を否定している。ラカンの対応はというところである。仮に倫理的要請に応えるならば、そこにおいて真の自己実現があるかというところではない。そのため倫理的要請を拒否すると、今度は普遍的な枠組みの中に主体として存在することが出来なくなる。仮にそのような事態になれば、自分が従うべき倫理をいわば自己流で作らなければならなくなる。ここにおいて問題となるのは、どちらが正しいかという判断を下すことではなく、例えばカントの定言命法をいかにして捉えるかということである。フーコーにしてもラカンにしても、カントの中に見たのは倫理的態度の可能性である。これはイデオロギーと関わってくる問題であって、日常的にある問題を提示

するなら、人類の進歩にとって経済の発展とそれによってもたらされる環境の破壊という互いに排除し合う二つの異なった立場において、どちらに普遍性があるのかということである。ここにおいて矛盾とまで言わないにしても、亀裂が生じていることは明らかだろう。全ての人にとって有益なという定言命法の論理の立て方自体に無理が生じてくる。ここで自分なりに普遍的だと思われる法則を作り上げて対応することになるのであるが、ブルトンが『ナジャ』において試みたのは「美」に関する存在のあり方であり、いわばブルトンにとっての存在の美学というべきものである。『ナジャ』の最後において唐突な印象を与える形で、「そこからある態度が必然的に美に関して生じるのだが、美はここでは恋愛の目的でしか今まで考察されてこなかったのは明らかすぎるのだ。」(PI p.752)と書き、まさにテキストの最後に次のように締め括るのだ。「[美は痙攣的であるだろうそうでなかったとしたら存在しないだろう。]」(PI p.753)

ここにおいてカントの『判断力批判』の中にある美的判断を参考にして考えることが出来るだろう。例えば何らかの対象について自分が美しいと感じることがあり、それは他の人にとっても同様に各自自分が美しいと感じる対象が存在するのである。数多くの人たちによって美しいと判断されるものが、普遍的に美しいと捉えられることはあるだろう。しかしこれは正しくない。自分が美しいと感じるが他の人はそうは思わないとか、あるいは逆に自分は美しいとは思わないが他の人にとっては美しいと感じることがあり、またその対象が存在する。その時その判断が依って立つ根拠とは何なのか。ここで答え得るものは感覚にどう訴えるかを問題にすることであって、各自の快不快を手掛かりにしているわけである。しかしそこには普遍的な概念というものは存在しないのである。善と悪、真と偽について概念化することは可能だろうが、美については難しいにも拘らず、我々は何らかの対象について美しいとか美しくないとか言うのである。ここにあるのは象徴的に普遍的な体系ではなく、つまりその中に自分の立場やその正当性を見出すということではなく、象徴的なものとして存在している美について自分なりの方法でそれを規定することが出来るということである。従って主体が美しいと感じればその対象は美となり、そうでなければ美とはならないということで、常に既に存在しているというわけではないのである。ここにおいて美が普遍的な根拠を持たない、つまり概念化することの出来ないものであるということが明らかになった以上、我々が普遍的な象徴体系を信じそれに従うことなど不可能だろう。だからこそブルトンは美に対する権利を主張するのだ。「それ(=美)はごくしゃくとした動きから作られていて、その多くはあまり重要性は持たないが、我々はそれが一つの動き (下線原文)を生じさせるよう定められているということを知っているし、実際持っているのだ。私が我が物にしたいとは思わないだろう全ての重要性を持っているのだ。精神は持ってはいない権利をあちこちで不当に手に入れるのだ。」(PI p.753)

美とは『ナジャ』においてはシュザンヌ・ミュザールを指し、ブルトンは愛に生きることを選んだのである。仮に美=シュザンヌ・ミュザールという等式が成り立たなくなっても、別の女性を設定することは可能であり、ブルトンは別に論理的に間違っていないのである。ただここにおいて再び神の問題、神学的次元に話を戻すなら、そもそも現実に存在した意地悪な神ではなくブルトンにとって寛容な神が存在していたとすれば、『ナジャ』は明らかに変わっていただろう。神は依然として問題であり続けるのだ。

注

- 1) 本文中にある引用部分の後もしくは参照箇所として括弧付きで記されている略記号は以下の文献を表わす。下線部分は原文ではイタリック体であり、原文で大文字表記は〔 〕で表し、引用符号guillemetはそのまま使用した。
(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1988
Nadja, 1928, pp.643-753
(LD) Jacques DERRIDA, *La dissémination*, Seuil, 1972
(MP) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *Mille plateaux*, Minuit, 1980
尚、ラカンの著作は多数あるが、本論考では次の文献を主として参考にした。
Jacques LACAN, *Le séminaire, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964*, texte établi par Jacques-Alain MILLER, Seuil, 1973
- 2) マルグリット・ボネによると、ブリュッセルの古本屋で編集者のマルセル・ディウがナジャはブランシュ・デルヴァルであると1975年2月の雑誌で断言したとのことであるし、1972年ガリマールから出された『ベルギーのシュルレアリスム・アンソロジー』の作者であるクリスチャン・ビュシは1966年9月15日にブランシュ・デルヴァルが自分に私がナジャであると明らかにしたと記しているが、これは全くのペテンだということだ。(PI p.1536)
- 3) 岩波明『精神科医が読み解く名作の中の病』新潮社、2013年、p.50
- 4) 1927年に精神科医になったラカンは、パリのサン・タンヌ病院のアンリ・クロード教授が主宰する「精神病及び脳疾患診療所」において神経学研究をしている。